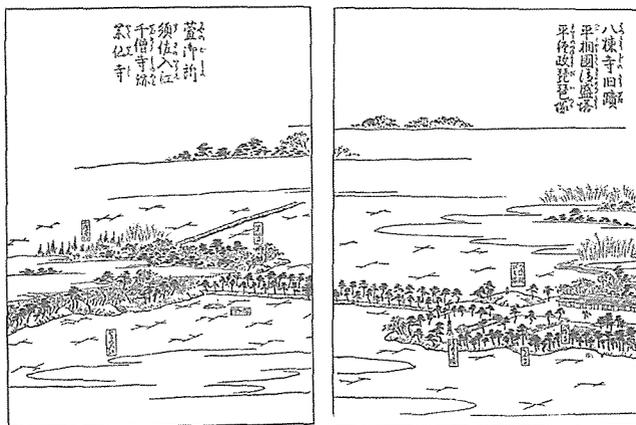


第五章 貴族政治と平氏の台頭



兵庫の旧跡（『撰津名所図会』）

第一節 純友の乱と摂関政治

第二節 院政と平氏の台頭

第三節 清盛と日宋貿易

第四節 「平氏政権」の成立

第一節 純友の乱と摂関政治

1 海賊の跳梁

海賊の発生 瀬戸内海は、京と九州を結ぶ古代における最大の基幹交通路だけに、古くから海賊が出没しと群党蜂起していた。その史料初見は『続日本後紀』承和五年（八三八）二月条のことで、ついで貞観

年間（八五九～七七）には備前の官物を積載した船が海賊に襲撃を受け、乗組員が殺害され荷物を奪われるという事件が勃発し、朝廷は播磨以下の国々に海賊討伐を命じている。海賊が市域に侵入したとする記録は存在しないが、第三章四節で触れたように律令国家によって大輪田泊の修築・管理が開始されており、市域に來航する船舶も少なくなかったはずで、海賊が交通の拠点である神戸市域付近に出没した可能性は高い。

こうした海賊たちの実態は不明確であるが、承和十一年五月に淡路国に來襲した他国の漁民の中には有力な皇族や貴族を意味する「王臣家」の牒（命令書）を持った者がいたことから、中央の有力者と結んだ豪族層が海賊に参加した可能性がある。九世紀後半以降、諸国でこうした地方豪族の活動が活発化していた。彼らの多くは地方に居住した元国司や貴族たちで、多大の動産を所有して、調・庸の代納や私出挙によって農

民を組織していた。彼らは史料上「富豪」「富豪之輩」等と称されていることから、学術的には「富豪層」と呼ばれている。

富豪層は中央権門との結合を背景として国衙や郡衙に対抗するとともに、いわゆる初期荘園を形成してゆくが、神戸地域が属した摂津・播磨両国でも、やはり富豪層の台頭と国衙に対する敵対行動が激化している。例えば、貞観二年の太政官符によると摂津国において「土人・浪人、皆王臣家人を称し、国吏の威勢を畏るなし、郡司の差料にしたがわず」という状態であった。さらに、四十年余り後の昌泰四年（九〇二）に播磨国に下された太政官符によると、国内の百姓の過半は六衛府の舍人を称するありさまで、所役の納入を対捍するばかりか、国衙の役人に暴行を加えるに至った。そして、注目すべきことに、彼らは時として「群党」を招いて国衙に対抗する武力としていたという。

この群党は当時の富豪層が結集して形成された武力組織と考えられ、ほかの地域の事例等から考えて、騎兵を中心とする機動性・流動性の強い存在であったと考えられる。こうした群党の活動は東国において活発で、彼らは激しい戦闘を通して武力組織として肥大化し、下向した桓武平氏以下の有力豪族に吸収されていたが、畿内周辺では必要に応じて動員される傭兵的な性格が強く見られた点は注意される。

それはともかく、九世紀半ばにおける海賊の出現は、かかる群党蜂起の一環という性格を有していたものと考えられる。その鎮圧等の過程は不明であるが、海賊に関する史料は貞観年間以降、いったん消滅することになる。そして、それが再度活発化するの十世紀前半の承平年間（九三二～三八）のことであった。

承平の海 承平二年（九三二）四月、太政大臣藤原忠平は「追捕海賊使」を議すことを命じ、暮れの十二
月にも備前の海賊について左大臣に命令を下しているが、翌年の十二月には「南海」の国々の
賊問題

海賊が「遍滿」するありさまとなり、阿波国の解状によつて諸国に警固使を派遣することを決定したとい
う。南海とは今日の四国・淡路・和歌山県地方を指す呼称で、淡路島周辺の瀬戸内海東部に海賊が出没して
いたことになり、大輪田泊をはじめとする神戸市域付近にも大きな影響を与えたものと思われる。

翌承平四年に入ると朝廷は、五月に山陽・南海の諸神に海賊平定を祈るとともに、新たな軍事的対応を検
討するようになる。まず、六月には弩とよばれた大弓を海賊追討に投入することを検討し、ついで七月には
兵庫允在原相安に「諸家兵士」「武蔵兵士」を統率させて海賊追討に派遣している。

このうちの弩は、九世紀末に新羅の海賊が対馬を襲撃した際に多大の戦果を挙げた新兵器であった。実物
は現存しないが、台座に固定して回転しながら水平に強弓を連続して発射するものであったと考えられてい
る。

一方、諸家兵士とは、前述した諸王臣家の家人となつていた富豪層等を動員したもので、従来の公的な軍
事制度の枠を越えた動員形態といえる。十世紀初頭の延喜元年（九〇二）、播磨国では諸家使が三、四人の火
長と称される武力集団の長を率い、その僕従が国内に猛威を奮つたとされており、諸家の武力が次第に強
固な軍事組織化していたことが分かる。朝廷は、このような諸家の武力をも動員したのである。また、武蔵
兵士とは武蔵国内の富豪浪人を徵募したものと考えられており、これも諸家兵士と同様に新たな軍事制度を
導入したものであった。

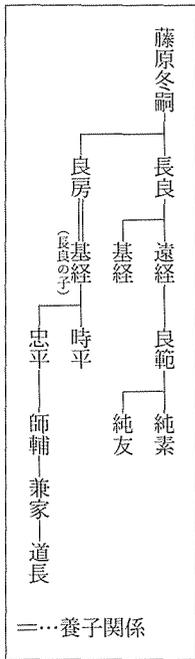


図29 藤原純友関係系図

このように、新兵器の投入や新軍事制度の導入を余儀なくされた点からも、海賊問題の深刻化は理解されるであろう。しかし、翌五年に入っても海賊は一向に収束の気配も見せず、京はもとより山陽・南海の諸神に対する奉幣が相次いでいるのである。ちなみに、土佐守の任を終えて、土佐から阿波・淡路を経て京に帰った紀貫之が、海賊を恐れながら有名な『土佐日記』を書き綴ったのは、まさに海賊の蜂起が熾盛を極めていた承平四年から翌年にかけてのことであった。

さらに翌六年の三月には、治部省において海賊の難を攘うために賊徒調伏を祈る「大元法」（太元帥法）が勤修されるに至った。これは臣下が勝手に行うことを禁じられた重大な秘法であり、事態の切羽詰まった状況が読み取れる。

純友の登場

そして、その同じ三月、後に天慶の乱の主人公となる純友の名が史料に登場する。すなわち、醍醐天皇の皇子重明親王の日記『李部王記』三月条（日不明）に「前伊与掾藤原純共、党を聚め伊与に向ふ」とあるのがそれである。これによると、純友は当時すでに伊予掾を経験していたこと、党と呼ばれる私的集団を結集して伊予に向かったこと等が明らかとなる。この部分に続いて「留連河尻掠内」という文言があるが、これについては字句の確定も含めて解釈が分かっている。異論はあるが、この河尻を神崎川河口の現在の尼崎にあたることれば、そこで純友は党を結集したこと

「留連河尻掠内」という文言があるが、これについては字句の確定も含めて解釈が分かっている。異論はあるが、この河尻を神崎川河口の現在の尼崎にあたることれば、そこで純友は党を結集したこと

になり、すでに神戸付近も含む瀬戸内海東部に勢力を有していたといえる。

また「掠」という字の読み方に疑義もある上に、別の史料から承平十八年（九三六）に純友は海賊追討官符を受けていたことが分かるため、この記事から直ちに彼が海賊行為を犯したものと断定できない。このために、同年六月に純友が伊予国の日振島に海賊千余艘を率いて結集したとする『日本紀略』の有名な記述にも疑義が呈されている。これらの点は、純友の乱の全貌を考える上では明確な解釈が必要ではあるが、現時点ではいずれと断定することも困難といえる。

ただ想像を逞しくするならば、おそらくはかつて伊予掾に在任した時期に海賊たちに影響力を有し始めていた純友が、海賊蜂起の激化に際して文字通り「夷を以て夷を制する」という窮余の策として追討使に起用されたのではないだろうか。そして彼の起用直後に海賊が沈静化したことから考えて、海賊を組織化し伊予守として海賊平定に成功したとされる紀淑人きのよしひとに寄与する面があったと考えられる。しかし、朝廷は純友の功績を認めることはなかった。彼はその後依然として「前伊予掾」に止められていた。この不満が純友を天慶の反乱に走らせることになる。

2 天慶の内乱

純友の蜂起

天慶二年（九三九）十二月二十六日、帰京を急いでいた備前介藤原子高一さねたか一行は、現在の西宮市夙川しゆくがわ付近とされる撰津須岐すきのつまぎ駅、あるいは別の書物によると芦屋駅において、藤原純友の

部下藤原文元の襲撃を受けた。激戦の末、数で劣った子高側は敗北し、降伏した子高は耳・鼻を削がれた上に播磨介島田惟幹（これのみまき）とともに捕らえられ、子高の子息は抗戦の末に殺害されるに至ったという。この時、子高が耳や鼻を削がれたのは、日頃から彼が海賊に加えた罰の仕返しであったらしい。

さらに、この惨劇の報が京に届いた三日後の十二月二十九日、信濃（しなの）の飛（ひ）駒（こま）使（つか）によって平将門（まかど）が上野・下野の国司を追放して坂東一円を占領したという衝撃的な事態が伝えられることになる。ほぼ同時に京にもたらされた東西における反乱の報告は、貴族たちを恐怖の底に突き落とした。将門・純友の共謀という噂が生じるのももっともといえる。

先述のごとく承平年間（じやうへい）（九三二〜三八）の海賊蜂起は、同六年に伊予守となった紀淑人の勸農という懐柔策によって海賊たちが農業に従事することになり、いったん沈静化した。しかし、天慶二年の五月に東西群賊の平定を祈って諸社に奉幣が行われていたように、この年に入って海賊は活動を再開していたものと考えられる。そしてこれを背景にして、子高襲撃の十日前、純友は伊予守淑人の制止を振り切って海上に乗り出したのである。

一方、子高は西国における賊徒の動きが活発化した天慶二年七月に備前介に任ぜられた人物で、海賊監視の役割を担っていたものと考えられる。したがって、純友は将門の反乱による朝廷の動揺を利用して国司に背き、こうした動きを報告しようとした子高を襲撃したのである。

かくして、東西同時の反乱という空前の事態に直面した朝廷は、年が明けるや元日早々に東海・東山・山陽諸道の追捕使（つひぶし）を任命し、山陽道には正五位下小野好古（よしのふる）を派遣することとした。ところが、朝廷はそれと並

行するように、正月三日に「海賊時、軍功を申す人」に対する除目じゆもくが行われ、二十日には子高襲撃の犯人である文元が軍監ぐんげんという官職に任ぜられ、さらに三十日には純友を従五位下に任ずることが奏聞そうもんされた。二月三日にはその位記が純友の下に伝えられたのである。

反乱の背景

かかる措置が純友に対する懐柔策であり、東西同時の兵乱を回避しようとする朝廷の方策であったことはいうまでもない。ただ、ここで注意すべきことは、「海賊時」とは恐らく承平年間（九三一～三八）の海賊追討を意味すると考えられ、その功賞の一環として純友等に対する叙位も行われた点である。先述のごとく、四年前の承平六年に追討使として下向した純友は、何らの恩賞も与えられていなかった。挙兵から間もなく純友に叙位が行われたことは、挙兵の背景に承平の海賊追討における彼自身とその部下に対する恩賞の不満が関係していたことを示唆する。

純友は叙位を伝えられると、直ちに朝廷に「悦状」を提出するなど恭順の姿勢を示した。しかし、それによって配下たちの活動が収まることはなく、むしろ純友の乱が本格化するのはいずれのことであった。撰政藤原忠平の日記『貞信公記』によると、早くも純友の位記が下された二日後の二月五日には、賊徒襲来を告げる解文げぶんが淡路から京にもたらされている。また同月二十三日には山崎（山崎）・川尻（河尻）の警固使が決定されており、純友の軍が京に接近していたことを物語る。

こうしたことから見て、将門の乱の噂を聞いた純友の士卒は京に潜入して放火を繰り返し、毎夜男は屋根に上り女は水を庭中に運ぶありさまであったとする『純友追討記』、『群書類従』の逸話も決して誇張とはいえない。すなわち、純友の軍勢の行動範囲は京にも及んでいたのである。したがって、先に子高を襲撃した

第一節 純友の乱と摂関政治

西宮・芦屋付近は彼らの勢力圏内であり、当然神戸市域もその攻撃にさらされていたものと考えられる。

純友やその有力な部下にしてみれば、叙位・任官によって挙兵の目的は一応達成されたといえよう。しかし、それ以後も海賊行為が継続したことは、配下の海賊たちが純友の制御し得る存在ではなかったことを意味する。長年の戦闘を通して有力豪族が党を組織化していた坂東と異なり、西国の武装集団の場合には傭兵的な性格が強く、指導者による統制が困難な状態にあり、さらに集団の構成員も盗賊・海賊としての性格が強かったと考えられる。こうした武力の存在形態が、純友の士卒たちの行動を規定していたのである。

戦闘の経緯
と乱の終息

さて、純友以下の海賊が横行する最中の二月二十
五日、坂東からの朗報に朝廷は沸き立った。東国
諸国を席卷していた将門が、下野押領使藤原秀郷と平貞盛によつて討伐されたとの飛脚使が到来したのである。その後二カ月程度で将門の残党たちも掃討されることになり、朝廷は東西挟撃の危機を脱するに至る。そして、六月十八日、満を持した追捕使小野

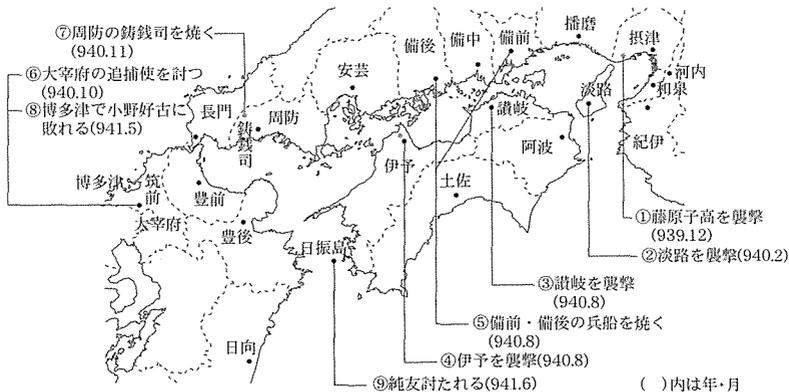


図30 純友の乱関係地図(入間田宣夫『日本の歴史7 武者の世に』所載の図を改変)

好古に対し、「純友の暴悪の士卒」を追捕する命が下されたのである（『貞信公記抄』）。あえて「暴悪の士卒」とした点に、盜賊的な性格の強い純友の軍勢の性格が示唆されている。いずれにせよ、これ以後朝廷は京に迫った純友とその部下に対する全面攻撃を開始することになる。

しかし、純友軍は八月に伊予・讃岐を攻撃し、続いて備前・備後を掠奪、さらに十月には大宰府、翌月には周防の鑄銭司を相次いで襲撃する等、追捕使をあざうかのような迅速な行動をとるのである。これに対し朝廷は十一月に追捕使の陣容を再度整備し、長官好古の下に次官源経基、判官藤原慶幸、主典大藏春実を任命することになるが、ここで注目されるのは経基の起用である。

経基は将門の乱に際して、将門の動きを密告したことから、征東軍の副将軍の一人にも起用され、すでに三月九日には大宰少貳に任ぜられている。すなわち、純友の討伐に際して朝廷は将門の活躍した武人・武力を投入したのである。こうした動向は一層顕著となり、翌年には征東大將軍であった藤原忠文が征西大將軍に任ぜられているし、平貞盛の投入も検討されているのである。このうち、経基は清和源氏の、貞盛は伊勢平氏の祖にはかならない。二つの兵乱を通して、次代の国家的軍事力を担う存在が形成されていったことになる。

こうした朝廷の積極的な対応策の前に、さしもの純友軍も劣勢となり、次將藤原恒利の離脱もあって弱体化を余儀なくされた。そして、天慶四年（九四二）五月に大宰府を襲撃して政庁以下を焼き討ちし、累代の財物を奪ったのも束の間、追撃した追捕使の攻撃を受け、博多津の合戦で「裸袒乱髮」という春実の奮戦の前に、船八百艘を奪われ、数百人の死傷者を出して惨敗を喫したのである（『純友追討記』）。そして、辛くも

本拠伊予に逃れた純友は、やはり将門の乱にも登用された警固使わたらはなのとわやす 橘遠保に討伐された。

また、部下で子高襲撃の張本人であった藤原文元父子と三善文公等よしみぎは播磨に逃れたものの、赤穂の合戦で文公が殺され、さらに但馬たじままで逃れた文元父子も同地で討ち取られた。こうして、勃発から二年近くを経て、ついに純友の乱は終息したのである。

さて、東西で時を同じくして勃発した将門と純友の反乱は、当時実施された地方政治の改革に対する不満の爆発という面もあった。したがって、この兵乱の平定にともなって地方政治も安定し、その上に撰関政治の繁栄も実現することになるのである。以下、撰関時代における政争や儀式・文芸を通して、当時の神戸市域について論じることにはしたい。

3 王朝の栄華

撰関政治 純友の乱が勃発する四十年程前の昌泰四年しやうたい（九〇二）、山陽道明石駅の駅長はある流人の一行

の確立 を迎えた。連行される人物は、何と右大臣として政界の頂点に立っていたはずの菅原道真では

ないか。道真の運命に驚きと同情を示す駅長おせうに対し、彼は「駅長おせう莫おせう驚おせう時おせう変おせう改おせう、一栄一落是春秋」という詩を吟じたという（『大鏡』）。謀叛の容疑で一転流人となった道真は、大宰府目指して下向の途中、陸路明石に立ち寄ったのである。したがって、恐らく後の西国街道を經由して西下したと考えられ、神戸市域を通つたに相違ないが、須磨浦の景勝も決して彼を慰めるものではなかったことだろう。

これによって、摂政は天皇が幼少の時に政務を代行し、閑白は天皇が成人した時に政務を補佐するという職能の区分が確立された。

また、その政務は決して摂関独裁ではなく、天皇と国母・外戚である藤原北家、父院や源氏といった天皇のミウチが相互に補充する共同政治という性格を有しており、これが摂関政治の基本的形態となるのである。先述のごとく承平・天慶の乱を克服して地方政治も安定したが、それと照応するように中央においてもミウチ政治を基礎とする摂関政治が繁栄への一步を踏み出すことになった。

摂関時代 しかし、摂関政治にはさらに波瀾が訪れる。天徳四年（九六〇）忠平の後継者として政界に大の政争 きな勢力を有していた師輔が死去したのを始め、ついで康保元年（九六四）には次代の国母が

約束されていた安子が、さらに康保四年には村上天皇が没したのである。このため政界は大きく動揺し、師輔の婿で醍醐天皇の皇子左大臣源高明と、師輔の遺子たちが対立するに至った。かくして、安和二年（九六九）にいわゆる安和の変が勃発することになる。

この事件は、武門（清和源氏）の武将源満仲が高明の婿為平親王を擁立した謀叛計画を密告したことを発端とし、さらに高明も陰謀に関与したとして大宰府に配流されるに至ったものである。一見すると道真の配

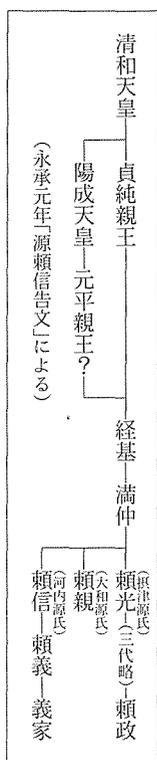


図32 武門源氏関係図 (安和の変関係)

流と類似しているもの、大きな相違がある。前者が天皇のミウチと異分子である道真の対立であっ

たのに対し、後者はミウチ相互の対立・内紛という性格を有していた。そして、道真が流刑先で寂しく死んだのに対し、高明は無事京の地を踏むことができた点も相違の一つといえよう。なお、満仲は純友の乱の平定に活躍した経基の長男で、摂津国川辺郡の多田（川西市）に本拠を置くことになる。その三人の子息が摂関時代に活躍する頼光・頼親・頼信である。

さて、摂関政治は、寛和二年（九八六）に強引に一条天皇を即位させて外祖父で摂政の地位についた兼家によって全盛時代を迎える。しかし、その頂点を極める道長の政権獲得に際して、再度激しい政争が勃発したのである。すなわち、長徳元年（九九五）、兼家の跡を継いだ関白道隆と弟道兼が急死したため、後継者をめぐって道隆の長男伊周と叔父道長とが対立することになる。翌年花山法皇一行を誤って襲撃したり、一条天皇の母で、道長の姉詮子を呪詛したことが原因となって伊周は失脚、この政争は道長の勝利となった。そして、落魄の伊周は道真や高明と同様大宰権帥に左遷されるが、いったんは播磨国に止まることを許されている。

彼が滞在していたのが播磨のどこなのかは不明であるが、陸路播磨に赴いたことと、『栄花物語』によると明石において「物思心の闇し暗ければ明石の浦もかひなかりけり」等の和歌を詠んでいる。その後、伊周はひそかに入京したことが発覚して大宰府に追いやられ、一年程の後に帰京を許されている。その後「儀同三司」、すなわち、正式の三司（大臣）ではないが「儀」（仮に）に三司と同等とするという役職に就くことになった伊周は、ほとんど活躍することもなく没した。

かくして、政敵を葬り内覧の地位を得た道長は、詮子の支援を受けながら女彰子を一条天皇の後宮に入内

させ、続いて中宮に立てて先例のない一帝二后を実現する。そして彰子が相次いで皇子を出産したことを背景として、摂関政治の極盛期を現出することになる。

このように、摂関政治の確立過程において政争に敗れた多くの流人たちが神戸市域を通過していったが、政情の安定とともに名勝が文学の素材として愛好され、また遊覧や保養等を目的として訪れる公卿も現れることになった。

王朝貴族 神戸市域には古くからの名勝が数多く散在し、王朝人の憧憬の対象となったものも少なくない。

と神戸 とりわけ須磨は、元来六歌仙の一人として知られる在原業平ありむらのなりひらの兄中納言行平なかつまひらの配流の地として早くから文芸の素材とされたが、紫式部が『源氏物語』に光源氏の須磨流謫を描いてから、その名声はさらに高まることになる。これ以後の勅撰和歌集において、須磨が歌枕として多数の和歌に詠まれた点からも、

須磨に対する貴族の憧憬は明白といえる。もっとも、式部は現地に下向していなかったとする説が有力であり、同様に多くの歌人たちの須磨に関する歌も、想像の産物である場合が多かったと考えられる。

一方、式部と並び称される才女清少納言も、『枕草子』において須磨を「わたり」(二〇段)、「関」(二二段)、「浦」(二〇六段)の代表とするなど、再三取り上げている。このほか、同書には「社」(二二六段)として生田神社の名も挙がっている。華やかな王朝文化を支えた女房たちが、神戸市域に深い関心を有したことが窺われよう。

もちろん当時、神戸市域を実際に訪れた貴人も少なくない。来訪先の代表は、六世紀の舒明天皇の時代以来の歴史を誇る名湯有馬温泉である。まず寛仁三年(一〇一九)二月には村上源氏の左兵衛督源頼定が病氣

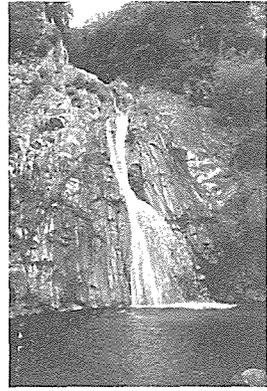


写真24 布引の滝 (中央区)

治療の目的で入湯し、万寿元年(一〇二四)十月には当時すでに撰政を退いて出家していた藤原道長が、大納言藤原齊信なりのみや子息の同頼宗・中納言長家等とともに湯治に赴いている。この時、道長は五十九歳を迎えておりしばしば病苦に悩まされていた。また齊信も病氣治療を目的としていたとあって、有馬あまが療養の地として重視されていたことがわかる。右大臣藤原実資さねすけの日記『小右記』によると、道長は十月二十五日に京を立て、十一月八日に帰京したという。さらに、長久三年(一〇四二)閏九月には道長の長男で、当時関白であった頼通も有馬に下向している。

また、布引滝も『伊勢物語』に「その滝、物よりこと也。長さ二十丈、広さ五丈許なる石のおもて、白絹に岩をつゝめらんやうになむありける」と描かれた由緒ある名瀑であった。そして『古今和歌集』にも、七夕の日に宇多上皇に同道した橘長盛が、滝を布に見立てた和歌が収められている。

ぬしなくてさらせるぬのをたなばたに わが心とやけふはかさまし

さらに時代は下って白河天皇の承保三年(一〇七六)には、藤原頼通の子息である関白師実もろざねが権大納言源顕房あきむら、権中納言藤原祐家すけいえ、源経信以下の人々とともに布引滝を見物し、滝の景観を讃える和歌を詠じている。この一行に加わった藏人頭源雅実ともみは

たちかへり生田の森のいくたびも 見るとも飽かじ布引の瀧

と詠んでおり、布引滝とともに、そこから見渡された生田森も景勝の地として貴族たちに賛嘆されていたこ

とがわかる。

その生田森にあるのが、『枕草子』にも記された生田神社である。同社は朝廷からも厚い信仰を受けており、神戸地域の神社としては長田神社とともに再三祈雨の奉幣が行われている。また祈雨のほかにも正暦五年（九九四）には疫病平癒の祈禱、さらに寛仁元年（一〇一七）には一代一度大奉幣が行われたとする記録が残っている。当時朝廷は伊勢・石清水をはじめとする、京・畿内の主要神社二十二社を国家的大事における奉幣の対象とし、摂津西部では西宮市の広田神社がそれに加えられているが、地域の両社はそれに次ぐ社格を有していたといえよう。

なお時代は下るが、後白河院政初期の永万元年（一一六五）六月の「神祇官諸社年貢注文」によると、摂津国の諸社のうち大依羅・住吉・座摩・垂水・広田社とともに、生田・長田の両社が神祇官に年貢を納入する主要神社とされている（『平安遺文』三三五八）。荘園・公領体制の成熟とともに、神戸地域の両社が次第に神祇官の荘園化していったことが判明する。

第二節 院政と平氏の台頭

1 院政と受領層

院政の成立

入内した女子が相次いで皇子を出産し、天皇・皇太弟を自身の外孫で独占するという希代の幸運児であった藤原道長は、文字通り並ぶもののない権勢を誇り、摂関政治の最盛期を現出した。しかし、道長を継いだ頼通は、半世紀にわたって摂関の座を占めながら入内した女子が皇子を出産せず、またその弟教通も外孫の皇子を得られなかった。かくして、治暦四年（一〇六八）には摂関家を外戚としない後三条天皇が即位したため、摂関政治も動揺することになるのである。

後三条が記録荘園券契所を設けて摂関家領も対象とする荘園整理を断行したのを始め、彼を継いだ白河天皇の親政段階においても、摂関家から天皇へ政治主導権を移行させる政策が相次いだ。こうしたことが可能となったのは、摂関政治段階のような摂関を中心とした天皇のミウチが高位高官を独占する体制が崩れ、醍醐源氏や小野宮流藤原氏のように学者・実務官人等の特定の家職とともに公卿の地位を継承する系統が多く出現していたことが関係していた。そして、白河の側近として活躍した醍醐源氏の源俊明に代表されるよ

第二節 院政と平氏の台頭

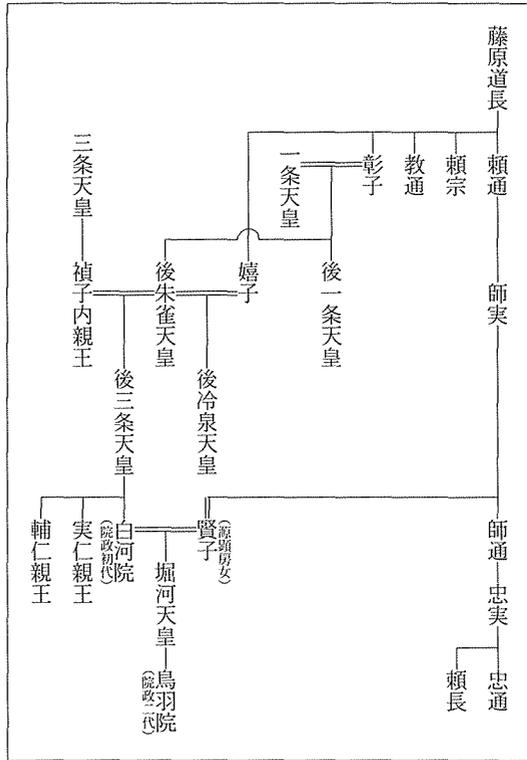


図33 撰関・天皇家関係系図

師実の子で、剛直で知られた関白師通は、白河院を抑えるとともに堀河天皇を補佐して政務の主導権を握り、「嘉保・永長の間、天下肅然」とさえ評されるに至った。

ところが、その師通が康和元年（二〇九九）に三十八歳の若さで急死したために、撰関家の権力は見る影もなく衰退していった。そして嘉承二年（二一〇七）、堀河天皇の死後に即位した鳥羽天皇の撰政をめぐる、藤原氏の傍流出身ながら鳥羽の外祖父にあたる藤原公実が師通の子忠実と争い、忠実は白河院の裁定に

うに、彼らこそが天皇を支持したのである。

やがて、応徳三年（二〇八六）、突如白河天皇は亡父後三条の遺言に背き、本来の皇位継承者である弟輔仁を抑えて、関白師実の養女を母とする堀河天皇に譲位した。一般にはこれによって院政が成立したとされるが、実際には師実が外祖父の地位を得ることになり、撰関家も回復の兆しを見せるのである。特に、

よってようやく摂政の座に就くことができたのである。この結果、摂関の任命さえも院の意のままとなるのであり、摂関家は完全に院に従属することになった。

さらに、二十八歳の堀河天皇が死去し、わずか五歳の鳥羽天皇の即位した結果、天皇親政は困難となり、白河が政治の主導権を掌握するに至った。ここに院政が本格的に確立したのである。したがって、院政確立の画期は、応徳三年の白河退位ではなく、嘉承二年の鳥羽即位と考えられる。

受領と国 こうして開始された院政は、摂関政治とさまざまな点で相違を示したが、特に摂関時代に形成の等級 された貴族社会の身分秩序と無関係に、受領や弁官・藏人頭等の実務官人、さらに学者等を

院近臣として登用し、大幅に官位を上昇させていった点に大きな特色があるといえよう。そして、院庁の実務を担当し、近臣を代表する地位である院庁の四位別当の大半を占めたのは、やはり藤原氏末茂流や同道隆流・良門流などの受領層であった。

受領とは、国々における政務の責任者で、おおむね国守と同義であるが、国守を歴任する階層については、決して国守層とは呼ばれず受領層と称される。かつて、院は受領層に擁立されたとする受領層政権論があったように、院政期においては受領が重要な政治的役割を果たしたとする見解が強く固であった。しかし、実際

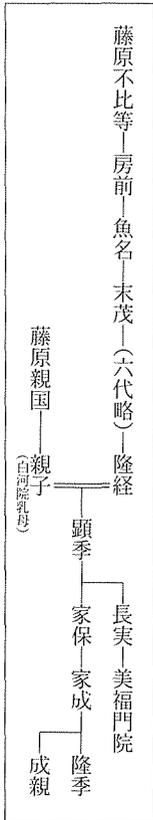


図34 藤原北家末茂流系図

には彼らの多くは院の乳母の関係者であったり、院の寵愛によって院政期に入ってから成

り上がった存在に過ぎず、その先祖が撰関時代において受領層として大きな足跡を残していたわけではない。また院政期においても、彼らは公卿に昇進しても散位さんゐに留まり、政治的に活躍することはほとんどなかった。同じ院近臣でも、「夜の闕白」と言われて白河院の政務決定に参加した実務官僚出身の藤原顕隆あきたかや、鳥羽院政期末期から後白河親政期にかけて政務を主導した学者出身の信西のぶにし（藤原通憲）らが、優れた実務能力や学才によって拔擢されたことは対照的といえよう。反面、受領層の近臣たちは、院に対し官職と引換えに造宮・造寺を行う「成功じょうこう」などによって文字通り目覚ましい経済奉仕を行っており、実質的に院の経済基盤となっていたといってもよい。

ところで、同じ国守といっても、国の経済力によって経済奉仕の内容に格差があるのはいうまでもない。またそれによって政治的地位にも相違が生じることになる。元来、国の等級については十世紀初頭に成立した『延喜式』「民部」に大・上・中・下の区分があり、これによると神戸市域が属する撰津せんつは上国、播磨はりまは大国に分類されていた。しかし、時代の推移とともに次第に等級にも変化が生じることになる。

例えば、撰関時代において、富裕で等級が高い国とされたのは、公卿が権守ごんのかみを兼任した国々である。当時、権守は形骸化しており、実質的には単なる収入源となっていたから、公卿が権守を兼任するのが最も富裕な国々であったと見られる。その国々とは、近江おうみ・丹波たんぱ・播磨はりま・美作みまさか・備前びぜん・備中びちゅう・備後びんご・周防すおう・讃岐さぬき・伊予いよの諸国で、『延喜式』の大国とは異なっている。

また、院政期においても公卿が権守を兼任する国々は同様であるが、日記等によるとこの時期には越後えちご・加賀かが・但馬たじま等も大国の評価を受けることになった。それはともかく、播磨国は『延喜式』の時代から院政期

に至るまで、一貫して高く評価されていたことになるが、こうした評価の背景や播磨守の活動について検討することにした。

院近臣と

播磨守

院政期における播磨の等級を示す興味深い史料が残されている。鎌倉初期に公卿流平氏の平基親が編纂した官職制度に関する故実書『官職秘抄』である。同書によると、播磨は伊予とともに「四位上臈これを任ず」と規定されている。院政期以降、国守の位階は四位または五位に限定されており、三位以上の公卿が国守に任ぜられることはなかった。したがって、四位の最上位である「四位上臈」の任国は、受領の任国中における最上位をも意味していたことになる。すなわち、院政期において播磨は、伊予とともに最も等級が高い、言い換えれば富裕な国だったのである。

この点は、院政期に播磨守となった者の大部分が、伊予守に転ずるか公卿に昇進しており、他国の守に転ずることがなかったことから裏付けられる。また、こうした播磨守には代表的な院近臣が相次いで任じられている。例えば、白河天皇の御願寺法勝寺造宮の中心となった高階為家、白河院のただ一人の乳母藤原親子の子藤原顕季やその子長実・家保兄弟のほか、伊勢平氏の武将平忠盛も晩年の仁平元年（一一五一）までその地位にあったし、彼の長男清盛は保元の乱の戦功によって播磨守となっている。また、平治の乱を起こしていったん京を占領した源義朝が播磨守に就任したのも、清盛に対抗するというより、播磨守の高い権威を欲した結果と考えるべきである。

このように富裕で、政治的にも格式の高い播磨守に就任した院近臣たちが、院に対し目ざましい経済奉仕を行ったのはいうまでもない。例として、院政期を代表する御願寺群である六勝寺の造宮を取り上げてみ



写真25 神出古窯址群出土の瓦（左）と尊勝寺の瓦（右）

よう。まず、承暦元年（一一〇七）における法勝寺建立の際には、先述した播磨守高階為家が、金堂・講堂・廻廊・鐘楼・経藏・南大門といった主要な建築のすべてを造営しているし、康和四年（一一〇二）に堀河天皇の御願寺尊勝寺が建立された際には、金堂・講堂等は但馬に譲ったものの、播磨守藤原基隆が東西二基の五重塔と南大門を寄進している。ちなみにこの基隆は、平治の乱の首謀者となる藤原信頼の祖父にあたる、白河院政期の代表的近臣の一人であった。ついで元永元年（一一一八）、

鳥羽天皇の御願寺最勝寺が建立された時にも、播磨守であった基隆が成功の人びとの筆頭に記されている（『中右記』二月二十一日条）。さらに久安五年（一一四九）に完成した近衛天皇の御願寺延勝寺の金堂を建立したのも、播磨守平忠盛であった。

このように播磨守が相次いで重大な成功を行った原因は、一つには富裕さがあったと考えられるが、そればかりではない。すなわち、尊勝寺の遺跡から発掘された瓦は、現在の神戸市西区にあたる播磨国明石郡の神出古窯址群から発掘されたものと一致するのである。発掘調査の結果、同遺跡において大量の陶器・瓦の生産が平安時代を通じて行われたことが確認された。優秀な瓦の生産こそが相次ぐ成功と大建築建立を可能とする大きな原因であり、このことが播磨国の格式を高める要因となったものと考えられる。

しかし、播磨守の高い権威も、保元・平治の乱頃を境として次第に変化し、

五位程度の受領も珍しくなくなっている。この原因は、知行国制度の一般化によって、受領が知行国主に任命される形態となり、位階が問題とならなくなったことにある。平治の乱以降、播磨はおおむね平氏一門の知行国となるが、これは先述の富裕さのほかに、清盛の別荘福原の後背地、そして西国の抑えという軍事的目的から、平氏が播磨を重視したためである。

一方、神戸市域を構成するもう一つの国撰津については、故実書等には具体的な評価が見出されない。次に記録類の記述によって撰津の評価を検討してみよう。

「最下国」

撰津の等級に関する記述が見られるのが、『中右記』嘉承三年（一一〇八）正月二十四日条の

撰津

除目じゆくについての記事である。この除目は、堀河天皇の死去、幼少の鳥羽天皇即位により白河

院が院政を本格化させた直後のものである。このため、白河院の意向が強く反映され、源義親を追討した平正盛が帰京を待たずに「第一国」の但馬に遷任されたのをはじめ、低い家柄出身の院近臣たちが、いずれも豊かで富裕な「熟国」の国守に任じられたとして、記主藤原宗忠は憤懣を記している。

そして受領が決定した十五カ国に対する評価を書いているが、その中で撰津は何と「最下国」と評されているのである。この時に同時に否定的な評価を受けた国は、大和やまと・淡路あわじ・薩摩さつま国などであった。このうち、薩摩は都から遙かに離れた遠隔地であるし、淡路は狭小な島国で田地も少ないことを考えれば、当時の貴族にとって当然の評価といえる。これに対し、大和と撰津の場合は、いずれも都に近く、また古くから開発された地域で田畑も多く、生産力や都との距離の点から否定的に評価されるとは考えられない。では、大和や撰津が低い評価をなされた原因はどこに存したのであろうか。

ここで注意されるのが、院政期の大和には春日社・興福寺の荘園が多数成立しており、受領はその支配の前提となる検注（土地調査）さえも困難な状態であった点である。すなわち、受領は荘園によって大きな制約を受けており、他国のように恣意的な収奪を行うことは不可能であったと考えられる。先述のごとく、院政期における国の等級は、国守の収入の多寡によって決定していたことを想起すれば、このことが大和に対する低い評価の原因であったと考えて差し支えないだろう。

一方、摂津でも似たような事情が存した。まず、摂津源氏が開発し十一世紀後半に摂関家に寄進した川辺郡の多田荘、それに隣接する橘御園たちばなののみその、さらに神戸地域の輪田荘といった摂関家領が、国内に多数成立していた。しかも、摂津国の有力な農民たちは、交代で上洛し摂関家の雑務を担当する大番舎人おほばんしやにんとして組織され、その保護下にあった。こうしたことから、大和の場合と同様収奪が困難な状況にあったために、摂津は「最下国」と評されたものと考えられる。

摂関時代の摂津守には、正四位下に至り内蔵頭・殿上人てんじやうひとともなった源頼光や、和泉式部の夫で道長の家司しであった藤原保昌ふさまさなど、摂関家の側近にあたる著名な受領の名が見えたが、右のように受領の任国として低い評価を受けた院政期の摂津守には、大國受領を歴任した名高い院近臣は見出されない。むしろ京の近隣という利点を活かして、実務官僚・学者等、在京の必要性の高い貴族たちの任国という性格を有していたごとくである。例えば、実務官僚の中心的家柄である為房流の出身で、弁官や摂関家の家司をつとめ能吏とされた藤原光房や、信西の子息で弁官として活躍しながら平治の乱で配流される藤原貞憲などがその代表的存在といえよう。

すでに、貞盛にも伊勢に進出していた形跡があるが、彼の四男維衡は桓武平氏良兼流の致頼等と抗争を重ねながら伊勢に根拠を確立し、彼の系統が伊勢平氏を称することになるのである。この維衡は道長・実資といった摂関時代の有力者に家人として仕えたが、伊勢をめぐる内紛で処罰を受けるなど政治的に低迷し、東国で活躍した河内源氏に圧倒された。その伊勢平氏を一躍歴史の表舞台に登場させ、政治的地位を急上昇させたのが、いうまでもなく清盛の祖父正盛であった。天仁元年（一一〇八）正月、出雲で反乱を起こした河内源氏の嫡流源義親を追討した正盛は、先にも触れたように、直ちに「第一国」但馬守への遷任を許された。そしてこれ以後彼は院近臣として受領を歴任するとともに、河内源氏に代わる武士の第一人者として海賊追討・悪僧強訴の防御等に活躍することになる。義親追討の大役が、貴族たちから「最下品」と蔑まれた無名の武士に回ってきた一因は、たまたま彼が乱の発生地に近い因幡守であったことにもあるが、やはり院近臣という立場も関係していたのであろう。

正盛が院に接近した原因は、承徳二年（一〇九八）に白河院の皇女郁芳門院の菩提を弔う六条院に所領を寄進したことにある。むろん、一介の下級軍事貴族にすぎない正盛がいきなり院に寄進できたとは考え難く、彼を院に推挙した人物があったと推測される。断定は困難であるが、正盛が主君として仕えた院の寵妃祇園女御、あるいは白河院近臣藤原為房、そして同様に院近臣で、先にも取り上げた藤原顕季らの名が指摘されている。

この為房・顕季と正盛の関係について触れておくことにしたい。当時、受領たちは任国の支配を代官である目代や郎従に任せ、京に止まることが一般的であった。これを遙任と称する。そして目代や郎従として現

地に下向し、時としてその爪牙となって収奪を担当したのが、伊勢平氏を初めとする下級の軍事貴族たちだったのである。

正盛は『平家物語』巻四「南都牒状」(以下、『平家物語』とのみ記した場合は、覚一本を意味する)によると、為房が加賀守在任中には檢非違所として奉仕し、同様に顯季が播磨守であった時には厩別当として仕えたとされる。こうしたことから、正盛は院近臣たちの知遇を得て、院への推挙を受けた可能性が高い。特に播磨守だった顯季の一族と伊勢平氏は、その後も代々密接な関係を結んでおり、院への橋渡し役としてふさわしい人物といえる。また、正盛が顯季に代わって播磨の現地に下向した点も、後の勢力扶植との関係で注意するべき点であろう。

平氏の西　さて義親追討後の正盛は、但馬守から丹後守に移り、永久二年(一一二二)に初めて瀬戸内海

国進出　沿岸の備前の国守に遷任することになる。二期にわたった同国守在任中、彼は海賊を追捕するとともに、元永二年(一一一九)には莊園領主仁和寺に背いた肥前國藤津莊司平直澄を追討している。この時、彼のもとには「西海・南海の名士」たちが随行したという。こうして、正盛は瀬戸内海の武士団に対して平氏の勢力を浸透させ、平氏発展の基礎を築いていったのである。その正盛は保安二年(一一二二)、讃岐守在任中に没し、彼の跡は長男の忠盛によって継承されることになる。

忠盛は天治元年(一一二四)に院の昇殿も許され、ついで大治二年(一一二七)以前に白河院の院庁の実務を担当する判官代に任じられる等、早くも院近臣として父を凌ぐ地位を獲得した。そして同年十二月には備前守に転じ、父に続いて瀬戸内海に勢力を扶植してゆくことになる。なお、白河院は死去の前年である大治

三年の三月から四月にかけて有馬温泉を来訪しているが、忠盛はその直前の高野御幸にも随行するなど、常に院の側近にあったから、彼が有馬にも同道した可能性は高い。

翌年七月、白河院が急死すると、父正盛が追討したはずの「義親」を名乗る者が京に出現し、しかもその「義親」が殺害された時には犯人の疑いを掛けられる等、忠盛の立場もやや動揺したかに見えた。しかし、彼はそれも難なく乗り切って鳥羽院の側近としての地位を確立し、天承二年（一一三〇）三月には白河の地に院の御願寺得長寿院を造営して内昇殿を許されるに至ったのである。

内昇殿とは清涼殿の殿上の間への出入りを許されることで、昇殿を許された者を殿上人と呼ぶ。この殿上人は天皇の側近を意味する地位で、公卿を除く四位以下の貴族たちの中では最高の権威を持っていた。したがって、内昇殿の許可は、かつての源義家や忠盛自身がすでに認められていた院昇殿とは比較にならない重要な意義を有していたのである。それだけに、有名な『平家物語』巻一の「殿上闇討」の説話に見られるように、父親の代まで「最下品」と呼ばれた忠盛の昇殿に対する貴族層の反発は強かったが、院の信任と抜群の財力・武力を有する忠盛の地位は微動だにしなかった。

その後、忠盛は順調に官位を昇進させてゆくが、それと並行して西国との関わりも深めていった。まず内昇殿の翌年承二年（一一三三）八月、当時院領荘園である肥前国神崎荘預所となっていた忠盛は、荘内に入港した宋船に対する大宰府府官の介入を、院宣を称して排除しようとしたという。神崎荘は有明海に面しており、同荘への宋船の入港は奇異に思われるが、実際には博多にあった倉敷（本所に送る年貢を一時収納する場所）に到着したものと考えられている。事件の顛末は不明確だが、忠盛は日宋貿易の利益に注目した

のであり、三十年余り後に大輪田を舞台に清盛が日宋貿易を展開することになる起源ともいうべき事件であった。

さらに、三年後の保延元年（一一三五）には、鳥羽院の命で瀬戸内海で再発した海賊を追討している。当初、追討使の候補として、忠盛とともに源義家の孫で河内源氏の当主である源為義も推挙されたが、忠盛は備前守として便宜がある上に、「西海に勢有るの聞こえ」があることから、追討使に起用された（『長秋記』長承四年四月八日条）。そして、八月には賊首日高禪師以下七〇名が京に連行され、実際に追討を担当したとみられる忠盛の郎従平惟綱と、忠盛の嫡男清盛に恩賞が与えられたのである。

ところが、この時に連行された者の多くは海賊ではなく、実は家人でない者を賊と称して捕らえたのだとする噂が流れている。真偽の程は確かではないが、追討使の立場を利用して強引な勢力拡大が行われたのは事実であろう。すでに忠盛は、白河院政末期の大治四年にも海賊追討を行っているが、この時には海賊が発生した形跡はなく、院が追討を利用して忠盛の勢力拡大を支援したのではないかと考えられている。したがって、今回の忠盛の強引な行動も、鳥羽院の黙認を得ていた可能性が高い。

また、先に見たように貴族たちが追討使として忠盛を推挙したことを考え合わせると、忠盛の西国における名声と武力は、京の生命線とも言うべき瀬戸内海を防衛するために必須のものとして、院はもちろん貴族たちにも認識されていたことになる。

忠盛の栄達

さて、忠盛は備前守の重任を経て美作・尾張守を歴任し、位階も四位の最上位である正四位上に昇った。そうした彼が、先述のごとく播磨守に任命されたのも当然のことであったとい

える。播磨守就任は、久安元年（一一四五）のことであった。

かつて父正盛が、国守藤原顕季の郎従として赴任した地の国守となったことに深い感慨を有したことであろう。しかも、先述のごとく播磨守は受領の最高位であり、公卿も目前となった。『金葉和歌集』以下の勅撰集に採録され、歌人としても高名であった忠盛は、この時に次の一首を詠んでいる（『異本忠盛集』）。

播磨守にてくだり給て、あかしの月をみて

おもひきやあかしのうらの月かけを わがものにしてなかるべしとは

この作品は、文字通り当時の彼の満足と得意の心境を率直に表現したものと言って差し支えないだろう。

また、播磨守在任当時、彼は任国に下向しており、その際に詠んだ神戸市域に関する和歌も残している（『流布本忠盛集』）。

播磨守に侍ける時三月ばかりに船よりのぼり侍けるに、津の国にやまぢといふところに参議為通朝臣

しほゆあみて侍るとききてつかはしける

ながるすな都の花も咲ぬらん われも何ゆへいそく船出そ

この作品は久安六年頃のものと考えられ、現在の東灘区魚崎・本山付近にあたる山路荘に、参議藤原為通が「塩湯浴み」に訪れていたことを示す貴重な史料となっている。為通は、後に太政大臣となる伊通の男で、同荘の領主と考えられる。彼は病弱であったのか、これから四年後の仁平四年（一一五四）に父に先んじて死去している。またこの和歌は、療養する為通に対する励ましを込めた忠盛の心遣いを物語る作品でもある。

話はそれるが、ここで詠まれている海浜における塩湯浴みとは、塩分の含まれた海水を熱して浴びるもので、当時療養方法として貴族によく用いられていた。『続古今和歌集』には永治二年（一一四二）に没した藤原基俊の次のような和歌が収められている。

世にあらばまた帰りこん津の国の みかげの松よおもがはりすな

『基俊集』に見えるこの和歌の詞書ことばがきに「しほゆあみんとてつの国のかたにまかりて」とあるように、現在の東灘区御影付近に塩湯浴みに訪れた際のものであった。こうした神戸市域のほか、鳴尾（西宮市）・芦屋・明石なども塩湯浴みの地として名高く、貴族たちの塩湯浴みに関する和歌や記録が残されている。

さて、忠盛に話を戻そう。彼は播磨守を二期務めたが、その間に宮廷の財宝を管理する内蔵頭くらりのかみや、鳥羽院とその寵妃美福門院の家政を取り仕切る執事別当を兼ねるとともに、先述した延勝寺の金堂造営、ついで高野山根本大塔再建などに活躍している。まさに大國播磨守にふさわしい経済面での活躍ぶりであったといえる。また先述のごとく、当時の受領としては珍しくたびたび現地に下向しており、平氏の勢力を扶植していた可能性も高い。

忠盛は仁平元年（一一五一）に播磨守を辞した後、刑部卿きょうぶのかみに任じられた。当時形骸化していたとはいえず八省の一つ刑部省の長官である刑部卿は格式の高い重職で、忠盛の任命に際して鳥羽院は、撰闋家の中心で保守派の代表的貴族である左大臣藤原頼長に任命の可否を尋ねている。これに対し頼長は「もしその種を論ずれば凡劣」（もし家柄をいえば卑しく劣っている）だが、正四位上に叙し、内蔵頭・殿上人の地位にある上に、播磨守を経ていることを理由として、任命を妥当とする旨を上申した（『台記』二月二十一日条）。ここに、播

磨守の持つ政治的権威が明瞭に示されているといえよう。

正四位上に至った忠盛にとって、公卿の座はまさにあと一息のところにあつたと言つてよい。しかし、ついに彼の寿命は昇進を許さなかつた。忠盛は、仁平三年正月十五日に五十八歳で没したのである。その報に接した頼長が、「救国の吏を經、富巨万を累ぬ。奴僕国に満ち、武威人にすぐる。しかるに人となり恭儉、いまだかつて奢侈の行ひあらず、時の人これを惜しむ」(『宇槐記抄』)という忠盛の人物評を日記に記したことは、あまりに有名である。

かくして、平氏一門の命運は忠盛の長男清盛に委ねられることになる。時に清盛は正四位下安芸守、三十六歳の壮年を迎えていた。

第三節 清盛と日宋貿易

1 武家棟梁清盛

保元の乱 平忠盛が没して三年後の保元元年（一一五六）五月末、院として政務を主導していた治天の君と播磨守 鳥羽院の重病を機に政界は深刻な動揺に見舞われた。当時の天皇后白河は、その皇子で美福門

院の養子であった守仁親王の即位までの中継にすぎない。前年の近衛天皇の死去に際して、皇子重仁親王の即位を阻まれて院政の望みを絶たれた崇徳上皇や、近衛呪詛の噂で籠居していた藤原頼長等の不満分子の蠢動を抑えこむだけの権威を有していたとは到底言い難いのである。こうした情勢下、六月一日には主要な武士が鳥羽の院御所と、内裏高松殿の警護のために招集された。院の没後、崇徳・頼長が兵を起すことに備えるためであった（『兵範記』七月五日条）。

ところが、武士の第一人者であった清盛は、意外にもこの時の招集から漏れている。この原因について『保元物語』は、忠盛が崇徳と親しく正室藤原宗子が重仁親王の乳母だったことから、鳥羽院が招集すべき武士に加えなかつたためとする。さらに同書は、乱の勃発寸前になって、美福門院の指示によって清盛が後

られる。

さて、後白河陣営は早くから有力な軍事貴族、檢非違使、さらに地方武士と、国家権力を用いた武力動員を行って周到な準備を行うとともに、次々に崇徳・頼長等を圧迫した。七月八日には頼長の邸宅東三条殿を接収したが、『保元物語』によると、東三条殿から謀叛の証拠が発見されたとして頼長に対して配流をも宣下したという。こうして追いつめられた崇徳・頼長は急遽白河殿に合流し、摂関家の家人源為義・平忠正等を招集した。興福寺の悪僧を含めて、彼らの武力は主として摂関家に属する武力であり、国家権力によって

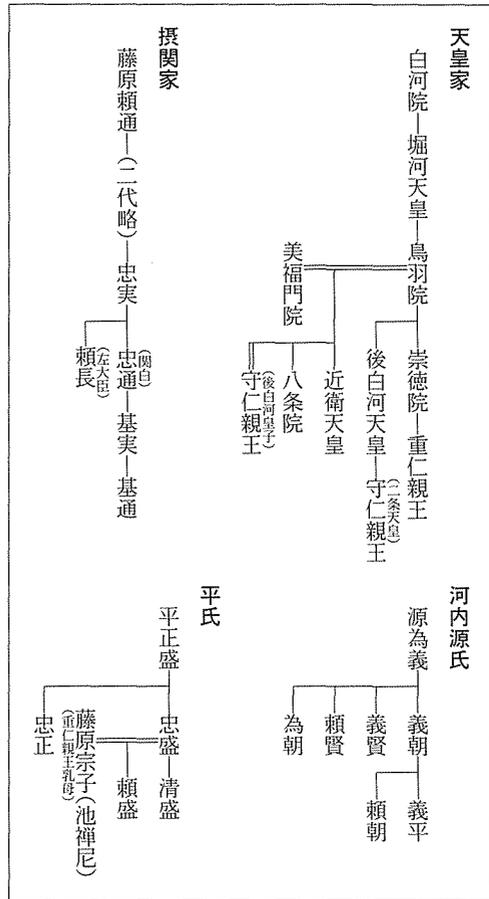


図36 保元の乱関係系図

白河方に参戦したとするが、七月五日に檢非違使が動員され京中の警備にあたった時には清盛の次男基盛も加わっており、『兵範記』、この間に清盛以下の一門は後白河方に加わったものと考え

動員された後白河方を凌駕することは不可能であった。

合戦は七月十一日未明に勃発し、平清盛・源義朝以下の有力軍事貴族を投入した後白河方の圧勝に終わった。この時に清盛が率いた武力について、『兵範記』は義朝の二百騎を凌ぐ三百騎、『保元物語』では義朝の二百五十騎を凌ぐ六百余騎としている。いずれにしても最大の武力を統率したのが清盛であったことに相違はない。史料の性格から考えて、おそらく前者が実数に近いものであろうが、後者が列挙している清盛軍の主要な武将の顔触れまでも完全に否定することはできない。これによると、清盛以下平氏一門と、本拠である伊賀・伊勢の武士が中心だが、備前の難波三郎経房、四郎光兼、備中の瀬尾太郎兼康等の名が見えており、祖父以来勢力を浸透させた瀬戸内海の武士が、主従関係を通して京の合戦に動員されていたことになる。

合戦の結果、崇徳・頼長方は惨敗を喫し、崇徳は配流され、頼長は戦傷死を遂げ、彼らに従った武士たちの大半は処刑された。清盛は叔父忠正やその子どもたちを斬首しなければならなかったが、勝利の成果も小さいものではなかった。まず、清盛は、五年前まで父忠盛が受領・経験の最後を飾るべく在任していた播磨守に就任した。すでに述べたように播磨守は受領の最高位であり、公卿は目前となったのである。また、弟頼盛・教盛たちも昇殿を許され、一門の政治的地位は大きく上昇している。

そして清盛は、翌保元二年に信西が主導した内裏再建に際して仁寿殿を造営している。同殿は内裏において紫宸殿に次ぐ規模を誇り、大國播磨守にふさわしい大事業であった。しかし、清盛は保元三年八月、任期半ばにして播磨守の座を女の婚約者で信西の男であった藤原成憲に譲り、自身は大宰大式に転ずる。大式は大宰府の次官に相当する地位であったが、当時は大式が任じられた場合には長官である権帥（本来の長

官師は名譽職）は任じられない原則となっていたため、清盛は事実上大宰府の長官の地位に就いたことになるのである。

当時の大宰府は日宋貿易の中心であり、おそらくこれ以後清盛の貿易に対する関心は決定的なものとなったに相違ない。だが、彼が貿易に本格的に乗り出す前に、さらに重大な政変を乗り越える必要があった。翌年の暮れに平治の乱が勃発するのである。

平治の乱

平治元年（一一五九）十二月、当時盛んであった熊野詣のために紀州路にあった清盛一行のもとへ、京から衝撃的な早馬が到着した。後白河院近臣藤原信頼と二条天皇親政派の藤原経宗・同惟方等と結んだ源義朝が蜂起し、信西を殺害、子息等を配流するとともに、天皇・上皇を幽閉して京を制圧したというのである。『愚管抄』によると、動転した清盛は帰途における義朝側の襲撃を恐れ、四国・九州落ちを思い立つありさまであったが、腹心平家貞の沈着な行動や、紀伊の豪族たちの協力もあって帰京を決意したという。そして彼は無事入京することに成功し、逆に小人数しか率いていなかった清盛を討ちえなかったことが義朝の最大の失策と評されていることは周知のごとくである。

しかし、清盛にとって本当に重大な危機だったのだろうか。

この事件は、院近臣の信西・信頼の対立と、武家棟梁である清盛・義朝の対立から発生したとされ、義朝の保元の乱にお



写真26 藤原経宗像（天子摂関御影）
（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

ける恩賞の不足等が挙兵の原因であったと理解されている。しかし、これは俗説に過ぎず、昇殿を認められた上に伝統的な重職である左馬頭さまたつを兼ねた義朝の恩賞は安芸守から播磨守に転じた清盛に勝るとも劣らぬもので、義朝に挙兵して清盛を打倒しなければならぬ深刻な動機はない。挙兵直後の除目じりくで、義朝は播磨守となったが、これは信西の息子成憲から奪取したものであった。先述のように、これは清盛に対抗したのではなく、播磨守の権威を求めたとみるべきであろう。

乱の真相は、政界を主導していた新興の信西一族を打倒するために、親政・院政派の伝統的院近臣たちが結束し、信頼と親しい義朝の武力を用いて蜂起したことにあった。しかも信頼は息子信親の妻に清盛の娘を迎えており、両者は姻戚関係にあった。したがって、清盛は最初から攻撃対象ではなかったのである。以上のように考えれば、彼が無事入京したのも驚くことではない。

一方、元来打倒信西という一点のみで結合していた信頼と、藤原経宗・惟方らの二条天皇側近派は、当初の目的を成功させるとたちまち分裂を生じることになる。そして親政派は清盛と連携し、ひそかに二条天皇を六波羅に脱出させてしまった。これを知った後白河院も、天皇と敵対して配流された保元の乱における兄崇徳の二の舞を恐れて、自ら近臣を見捨てて仁和寺にんなに逃亡するのである。

この結果、信頼・義朝等はまったく孤立し、対照的に当初は局外にあった清盛は、いまや一躍官軍の総大将となった。天皇・上皇を失って自己を正当化する根拠が消滅した義朝軍からは源頼政等の離反者が続出し、六波羅における決戦でも惨敗を喫することになる。信頼は降伏したものの処刑され、義朝も敗走の途中で殺害された。また、乱の收拾に貢献した親政派の経宗・惟方も、当初信頼に加担した上に、乱後に後白河院と

対立したために失脚した。この結果、勝利の成果は事実上清盛が独占するに至ったのである。

かくして、平治の乱後の清盛は武士の第一人者であることはもちろん、廷臣としても大きな発言力を得た。もっとも、まだ政界を動かす力量はなく、後白河院政派と二条天皇親政派が激しく対立を続ける中で、「アタコナタ」〔愚管抄〕して双方に仕え、巧みに政界を遊泳していた。やがて、永万元年（一一六五）、二条天皇が死去した後白河院政が確立すると、清盛は妻時子の妹で後白河の寵妃であった滋子を介して後白河と政治的に協調し、急激な栄達を遂げることになる。

すでに乱の翌年、父が到達しえなかった公卿の座を突破していた清盛は、仁安元年（一一六六）には内大臣に、翌年二月にはついに太政大臣に至るのである。撰関・大臣家以外の者で大臣を許されたのは、基本的に皇族・外戚のみ〔官職秘抄〕で、鎌倉時代を通して院近臣家出身者の昇進はなかった。したがって、清盛の大臣昇進は『平家物語』で知られる清盛皇胤説が公認されたに等しい処遇といえる。

もちろん、彼のみならず平氏一門の躍進も目ざましいものがあつた。仁安二年の段階では、長男重盛が清盛の太政大臣昇進と同日に権大納言となり、五月には院から諸道の軍事・警察権を付与されているのをはじめ、弟頼盛も散位ながら従三位となって公卿に列して大宰大貳を兼ね、さらに義弟時忠、男宗盛も共に参議となつた。清盛以下五人が公卿の座を占め、一門が強大な勢力を有したことも言うまでもない。

以上、京における清盛の動向を述べてきたが、かかる権勢を背景として彼は福原・大輪田に進出してゆくのである。次に、清盛と神戸市域との関係を論じることにはしたい。

2 清盛の大輪田進出

八部郡の 大輪田の地に清盛が関係したことが初めて確認されるのは、応保二年（一一六二）のことである。すなわち、「九条家文書」に残されている建仁二年（一一二〇）の輪田莊莊官源能信等申状

〔『九条家文書』三三三二〕によると、応保二年に清盛の家使藤原能盛が撰津国八部郡を検注し、以後同郡を知行したというのである。八部郡は現在の神戸市の中央区の西半、兵庫区・北区の一部、長田区・須磨区の全域

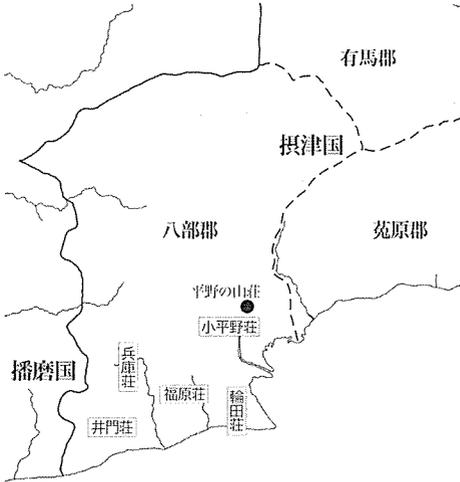


図37 八部郡地図

にあたり、いうまでもなく清盛の本拠福原や大輪田泊を含む地域である。また検注とは、先述のごとく国司や荘園領主が官物や年貢を確保するために行う土地調査を意味するが、ではどうしてこの時期に清盛の家使が八部郡を検注したのであろうか。この検注の問題について検討することにした。

まず史料の性格について説明しておこう。この文書は、鎌倉時代初期の建仁二年に本所である九条家が輪田莊莊官に対し、荘園領域が減少した原因を尋ねた際

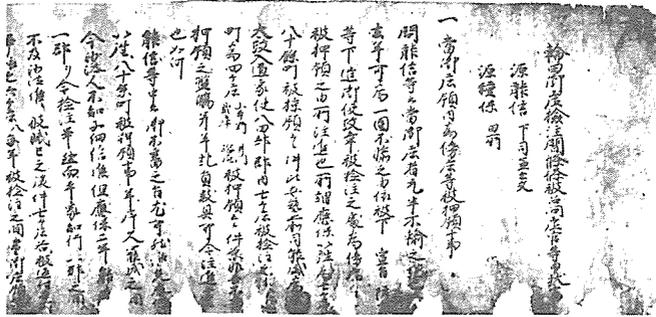


写真27 輪田荘莊官源能信等申状 (九条家文書)
(宮内庁書陵部蔵)

田荘はすでに応保以前から周辺七カ荘によって八〇余町を掠奪されてきたが、応保年間(一一六一〜六三)に平清盛の家使藤原能盛が検注した際に、小平野・井門・武庫・福原の四カ荘によって三一町を奪われている。また、この検注は応保二年に行われたが、これ以後も平氏は八部郡を知行していた。そして七カ荘が本所に返却されたのが平氏滅亡後であったとあるように、周辺の各荘は平氏によって占拠されていたことになる。

こうしてみると、清盛は強引に八部郡に食い込み、検注を通して周辺荘園を侵略していったと考えられる。ここで問題となるのは清盛が検注を行い得た原因である。当時、摂津の国守・知行国主は平氏一門ではなかったし、また能盛が「家使」と称されたように、この検注はあくまで私的なものと考えられる。家使となった能盛は、清盛の家司として平氏の家産機構で活躍した官人であった。一方、輪田荘を侵略した福原荘が平氏領であったことを考えると、周辺の諸荘園の領有を背景として、清盛が強引に郡内に対する検注を行った可能性もある。

また、撰闕家領輪田荘に対する侵略の背景には、保元の乱以後平氏一門が撰闕家領の預所等として、荘園管理に進出していたことも関係していたと考えられる。すなわち、乱において頼長に従属した源為義・

平忠正以下、撰関家の家産的武力が全滅したために、うしろのちよじや氏長者に復帰した忠通は荘園を管理する独自の武力を失っていた。そこで、忠通は荘園支配の武力として平氏を起用せざるを得なかったのである。このことが、平氏の政界における地位を上昇させる一因となった。いずれにせよ、この検注は平治の乱の後、朝廷において大きな勢力を有するに至った清盛の権力を背景として初めて実現したのである。そして、能盛が八部郡を知行したように、平氏は以後も同地を占拠して周辺の荘園を蚕食し、事実上平氏領化していったと考えられる。

ところで、この時期の清盛の官職を考えてみると、彼は永曆たいりやく元年（一二六〇）十二月三十日に大宰大貳を去っていることが注目される。おそらく彼はその在職中に多大な貿易の利潤を得たものと考えられる。先述のごとく平氏が父忠盛の代から貿易に関心を持っていたことを考えれば、清盛がいったん手にした貿易の利益を簡単に手放すとも考えられない。すでに権中納言として京の政界に大きな位置を占めていた彼は、在京しながら貿易の利益を獲得する方法を模索していたに相違ない。

そこで、清盛は京にも近く、瀬戸内海に面した港湾として優れた大輪田泊に着目したのではないか。また、この付近に清盛が家産機構に影響力を強めている撰関家領が多いことも、進出には好都合であったと考えられる。応保二年に、清盛が強引な検注を行い八部郡を事実上私領化していった原因は、この点にこそ存したのである。

かくして、八部郡福原を拠点と定めた清盛は、やがてこの地に自身の別荘を建設し、本格的に貿易に乗り出すことになる。

平野の山荘

治承四年（一一八〇）二月、清盛が太政官に提出した解状じょうじょうによると、彼が「摂州平野の勝地を占め」たのは、「遁

世退老の幽居」、すなわち、出家・隠居後の生活を送る邸宅とするためであったという（『山槐記』三月五日条等）。彼が政界をいったん引退し、出家したのは、太政大臣となった翌仁安三年（一一六八）二月のことであった。そこで、まず清盛の太政大臣辞任から出家に至る事情を記しておくことにしよう。

清盛は仁安二年五月、就任からわずか三カ月余りで太政大臣を辞任している。通常、清盛が令制官職の頂点を究めた出来事として、彼の太政大臣就任は特筆されることが多い。しかし、十世紀末期に摂関と太政大臣が分離して以来、太政大臣は実権を伴わない一種の名誉職となり、政界の長老や摂関を断念した摂関家傍流の者が就任する地位となっていた。したがって、清盛にしてみれば太政大臣就任は皇胤としての箔付けであり、当初から短期間で辞任し、あとは自由な立場で政務に参加するつもりであったと考えられる。

ところが、翌年二月、清盛は思いもよらぬ重病で生命の危機に陥ったため、出家によって政界からの引退を余儀なくされたのである。そしてこれ以後、彼は平氏一門の京における代表者の地位を、事実上長男の権大納言重盛に譲ることになる。こうしたことから、清盛は摂津平野に山荘を建設し引退後の居住地としたのである。



写真28 平野（兵庫区）付近の風景



写真29 「雪見御所」の碑
(兵庫区湊山小学校北西隅)

翌嘉応元年（一一六九）から、後白河院を招いて大規模な千僧供養が開催された事実は、清盛が福原を拠点としたことの明証といえよう。そして同時に、清盛はこれ以後同地を本拠として、日宋貿易に本格的に乗り出したのである。以後、特別な事件がない限り清盛は上洛することなく、原則として福原に居住することになる。

さて、この「平野」という地名は再度山ふたまたみの南斜面を指す地名として現存しているが、当時はより広範な地域の呼称であった。『山槐記』治承四年十一月二十二日条によると、平野にあった清盛の邸宅は、現在の兵庫区雪御所町ゆきのごしやという地名の起源となっている。「雪御所」(『平家物語』では「雪

見御所」)の北に隣接していた。そして、その南部一帯が福原にあたり、さらにその港湾が大輪田だったのである。

清盛邸のあったとされる場所は、湊川の上流である天王川・石井川が再度山から平野部に流れだす地域で、いわば湊川が形成する扇状地の頂点にあたる場所である。今日、雪御所の旧地とされる地域はすっかり市街地化して海を眺めることは難しくなってしまったが、それから少し再度山麓を登った高台にある平野町の祇園神社からは、兵庫区の町並みを越えて兵庫港までも見通すことが可能である。おそらく、当時の清盛からも福原の地と大輪田泊は一望のもとで、泊に入る宋船も手に取るように眺められたことであろう。

さて、清盛の居住地であるとともに日宋貿易の交易拠点でもある福原には、清盛に続いて平氏一門も相次

いで邸宅を建築することになる。そして、大輪田泊における日宋貿易も大きく発展してゆくのである。

大輪田泊 さて、日宋貿易が本格的に展開してゆくのに際して、その拠点である大輪田泊の港湾としての

の修築

整備が問題となる。以下、「経の島」築造をはじめとする大輪田泊の修築の問題について述べておくことにしたい。

先にも触れた治承四年（一一八〇）二月に清盛が太政官に差し出した解状は、大輪田泊の修築を国家事業として遂行することを求めたものであった。これによると、彼は「輪田崎は上下諸人経過絶ゆるなし。（中略）しかるに東南の大風つねに扇ぎ、朝暮の逆浪凌ぎ難し」という状態であったので、摂州平野に隠居した後「私の力を励まして新島を築くといへども、波勢つねに險しく、石掠全うせず」というありさまで、あらためて国家的事業として造営を再開することを求めたのである。この私力による新島造営が、いわゆる「経の島」築造として知られる土木工事であったと考えられる。

そもそも、この大輪田泊は平安初期以来、摂津の河尻や播磨の室津等と並ぶ五泊の一つとして重視されてきた。古くは、弘仁三年（八二二）に嵯峨天皇の命によって造営が行われており、以後も朝廷、ついで摂津国による修築がなされていたが、寛平年間（八八九〜九八）には徵発された摂津国住人の反発によって修築が困難な状態となった。このため、延喜年間（九〇一〜二二）には山陽・南海両道に綸旨を下して国家的な修築事業が行われ、また天曆元年（九四七）にも「造輪田使」任命が議されている（『日本紀略』七月五日条）が、それ以後は清盛に至るまで修築に関する史料は見出されない。

さて、ここで清盛が大輪田泊の防波堤として経ヶ島築造を開始した時期が問題となる。これについて、

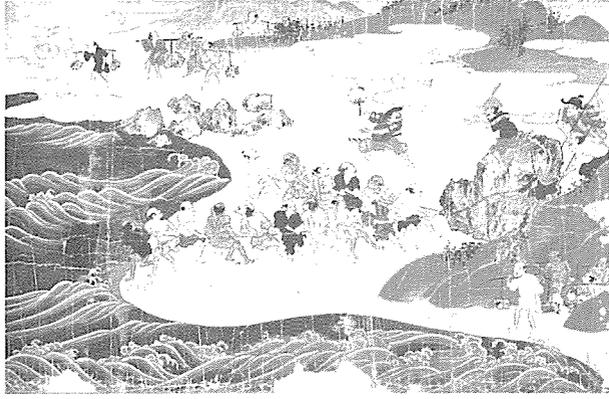


写真30 「経ヶ島縁起絵」(東京国立博物館蔵)に見える大輪田泊修築の様子

本『平家物語』、『帝王編年記』以下が述べる様に承安三年(一一七三)以降とするのが妥当といえよう。この頃は、大輪田における日宋貿易が軌道に乗り始めており、清盛が私財を投入して大土木事業を始めるにふさわしい時期といえる。

こうして、港湾の整備も進む中、大輪田における日宋貿易も大きく発展することになるのである。以下、

『平家物語』は応保元年(一一六一)二月上旬に開始され、いったん同年八月の暴風雨で崩壊したものの、阿波民部重能(田口成良)の奉行で同三年に完成したとしている。同書は、人柱を立てようとする公卿の僉議(けんぎ)を退けて、清盛が経文を書いた石を沈めて工事を完成に導いたとしており、迷信深い貴族と無駄な犠牲を回避する合理的な清盛とを鮮やかに対比した逸話の体裁をとっている。

しかし、右に触れた清盛の解状には、仁安三年(一一六八)の引退後に修築が開始されたと明記されている。しかも、応保元年当時はまだ八郡の検注さえも行われておらず、福原・大輪田に清盛は進出していなかった。こうしたことから考えて、応保元年に工事が開始されたとする『平家物語』の所伝は到底事実とは考えられない。

実際に泊の修築が清盛によって行われたのは、延慶本・長門

貿易の実態を検討することにしたい。

3 大輪田の繁栄

平氏と日 大輪田における貿易の展開を論ずる前に、それまでの日宋貿易の歴史について簡単に振り返っておくことにしたい。

西暦九〇七年における唐の滅亡の影響は周辺諸国にも波及し、相次いで渤海・新羅が滅亡していった。こうした東アジア世界における動乱を回避するために、日本は唐の末期である寛平六年（八九四）に遣唐使を廃止したのを始めとして、公的な外交を断ち切り事実上の鎖国政策をとるに至ったとされる。しかし、実際には十世紀初頭にも多くの中国・高麗の商船が来日しており、貿易を制限する官符かんぷまで下される程であった。しかもその来航は、大宰府を中心とする北九州に限らず日本海側各地においても見られたのである。

さらに、西暦九六〇年に成立した宋では、十一世紀後半の神宗皇帝の下で、財政の回復を目指す王安石の改革が行われ、その一環として周辺諸国に対する積極的な外交貿易政策がとられた。そして後一条天皇の時代や、白河親政期の承暦年間（一〇七七～八一）には国書が到来したことから、朝廷も宋との貿易を本格的に検討することになる。しかし、宇多天皇が皇子醍醐天皇に与えた『寛平御遺誡』に記されているように、天皇は「外蕃」たる外国人とは直接対面するべきではない等という保守的な対外意識を持つ朝廷が、公式な外交関係を再開することは困難であった。このため、結局は大宰府を窓口として貿易が展開することになり、

他地域に來航した船舶も大宰府に回航されるに至った。

十二世紀には、入港した宋船に対し大宰府府官が検問する慣例が成立していたように、大宰府による貿易管理が確立していった。これによると、船舶が入港した場合、まず朝廷が優先的に舶載品を購入し、ついで権門が交易を行う形態をとったという。しかし、その一方では、先述のごとく忠盛が院宣を称して独自に貿易を試みたように、貿易に対する国家管理を打破する動きも見られた。また大宰府の外港博多津をはじめ、西国各地の莊園等において私貿易も展開してゆくのである。さらに、十一世紀末には宋人が数多く博多津に居住し、十二世紀半ばには宋人の住宅は千六百宇にも及んだというが、彼らも独自に日本側の権門と接触していったと考えられる。かかる動向は、次第に独自の民間貿易が拡大していたことを物語っているものである。

平氏が日宋貿易に関与した最初は、右のごとく肥前国神崎莊の預所となつて北九州に拠点を築いた忠盛の時期であつたが、その後の貿易とのかわり合ひは定かではない。やがて清盛が保元の乱後に大宰大式に就任すると、九州の兵乱鎮圧に活躍して平氏の勢力を浸透させていった。特に、貿易の実権を掌握し大宰府の実務を担当した府官（一般の国における在庁官人）に対する影響力を深めたものと考えられる。また同時に、大式を退いたあとも清盛が福原の占拠によって日宋貿易を計画した背景には、大宰府における経験、そして日宋貿易が大きく発展しつつあったことが関係していたのである。

さらに、清盛の後を継いで永万二年（一一六六）には弟頼盛が大宰大式に就任したが、彼は先例を破つて現地に下向している。そして、この時には府官であつた宇佐公通を権少式に任命し、また有力府官の原田氏

の組織化も進めたものと考えられる。このように、平氏は大宰府府官の組織化によって、大宰府の機構を従属させるとともに、大宰府が有してきた貿易に対する支配権を吸収するに至ったのである。

かかる布石を経て、前例のない宋船の瀬戸内海進入と、京の膝下ともいえるべき大輪田における貿易が開始されることになった。

大輪田の 宋船の大輪田への来航が史料の上で初めて確認されるのは、嘉応二年（一一七〇）九月のこと

宋船 である。この時には後白河院も宋人を謁見するために大輪田に下向している。宋人たちは清盛

からの遣使の返礼と推測される。これを聞いた右大臣九条兼実は、「延喜以来未曾有の事也、天魔の所為か」等といった批判を日記『玉葉』（九月二十日条）に記している。延喜は、遣唐使が廃止された寛平の次の年号で、院の外国人との接触は遣唐使廃止以来だというのである。兼実に限らず、例の『寛平御遺誠』に代表されるような、当時の一般貴族の排外的な思想を考えれば、院の宋人謁見はまさしく破天荒な出来事といえよう。

この謁見は、後白河が日宋貿易の発展に重大な関係を有していたことを物語っている。大宰府を越えて瀬戸内海に宋船が進入できた原因の一つが、後白河院の貿易に対する支援・協力にあったことは、つとに指摘されてきたところである。清盛と後白河という、まさしく王朝の制法を無視する大胆な個性の結合によって、日宋貿易は軌道に乗ったことになる。かくして、大輪田は首都京の外港として、院も参加する国際貿易の舞台に躍り出たのである。

その翌承安元年（一一七一）七月には羊五頭と麝一頭が後白河に献上されている。おそらく清盛が宋

との交易で入手した動物たちであったと考えられる。ところが十月に京で疫病が流行ると、人びとは「羊の病」と称して、院御所における羊の飼育を批判したため、羊は返却されたという。後の治承三年（一一七九）六月頃、大量の銭貨の流通と時を同じくして発生した流行病を人々が「銭の病」と号したことともに、貴族たちが貿易や外来の文物に対する忌避・恐怖の気持ちを抱いていたことを示す事件といえるだろう。

一方、そうした頑迷な貴族たちの恐れや批判を尻目に、清盛は日宋貿易に深く関与していった。承安三年三月には来日した宋使に対し清盛自身が対面しなかったために宋人が激怒する事件が起こっている。ちょうど清盛は、後述する千僧供養において護摩法を修していたために対面できなかったのであるが、この事件はすでに清盛が宋人と再三面会し親密な関係にあったことを物語る。例によって兼実は「異国人」と親昵となることを厳しく非難している（『玉葉』三月二十一日条）が、古い観念と固定的な儀式に生きる貴族たちにとっては、唐滅亡後の動乱を乗り越えて安定した国際秩序が形成されつつあったことなど、容易に理解できるはずもなかったのである。

そして、あたかも新たな外交関係の確立を象徴するように、承安二年九月、宋の明州刺史から「日本国王」および太政大臣入道に宛てて供物が到来するのである。『玉葉』によると、それに添えられた送状が退位した後白河法皇を宋皇帝の臣下である日本国王と称し、日本国王に「賜」わるとしたことで、そして一地方官にすぎない明州刺史の書簡である点が「奇怪」であるとして貴族たちの非難を浴びた（九月十七日条）。特に前者については、かつての唐でさえも名目上は対等関係であったことから貴族の反発は強かったが、結局翌年三月に左大臣藤原経宗の計らいで返牒と答進物が遣わされている。返書の発給は、一応公的な外交関係が



写真31 祇園遺跡出土の輸入陶磁器

締結されたことを意味するもので、以後通商関係は一層円滑なものとなったと考えられる。

こうして軌道に乗った日宋貿易だが、ここでその交易品を考えてみよう。輸入品としては先にも触れた宋銭をはじめ、薬品や『太平御覧』等の書物等が有名である。特に『太平御覧』は、治承三年十二月に西八条の清盛邸に行啓した皇太子言仁親王（後の安徳天皇）に対する贈り物として献上されたもので、宋から初めて海外に流出したものであった。清盛と宋との関係の深さを明示するといえよう。

一方、輸出品を検討してみると、先に触れた返牒とともに「遣物」として、後白河院が蒔絵厨子一脚、色革三十枚、そして砂金百両を送った点が注目される。工芸品はともかくとして、砂金が一般の貿易においても大きな比重を占めていたことは想像に難くないだろう。まさに貿易が本格化した嘉応元年、砂金の産地である陸奥の支配者藤原秀衡が、地方豪族としては破格の地位である鎮守府將軍に任命されている。このことは、貿易の開始にもなっており、砂金の重要性が高まったことの結果と考えられる。日宋貿易において砂金が出産品として有した意味の大きさを明瞭に物語るものといえよう。

このほかの輸出品としては、硫黄・材木などがある。硫黄は平氏の影響力が強い九州で産出し、宋において火薬の材料となった。また、材木は森林が消滅しつつあった宋にとって重要な輸入品であり、同時に貿易船が往路の銅銭に代わるバラストに利用したものと推測されている。

福原の干

先述のごとく、大輪田における日宋貿易が繁栄した大きな原因には、貿易に関する清盛と後白僧供養 河院の協調があったと考えられる。そして両者の緊密な関係を象徴する儀式が、福原において毎年三月と十月の二回行われた千僧供養であった。後白河は、清盛の妻時子の妹にあたる寵妃建春門院とともに、それらの多くに列席していた。

千僧供養の最初は、清盛が出家した翌仁安四年（一一六九）三月のことであった。高野山御幸の帰りに四天王寺を経てその場に臨んだ後白河を迎え、千人の僧侶が千部の法華経を読誦するとともに、清盛の出家に際して受戒した天台座主明雲が導師を務めている。続く承安元年（一一七二）十月には重盛以下の平氏一門や、源資賢・藤原兼雅等六人の公卿、十人余りの殿上人が随行し、先述したように八部郡の検注を行った能盛以下が、福原御幸の家子賞として正五位下に叙されている。

つづく承安二年三月の千僧供養の詳しい実態は、『古今著聞集』巻二に収められた「平清盛福原に於いて持経者千僧にて法華経転読の事」という説話から明らかとなる。この時には、後白河院以下諸院・公卿・殿上人以下が奉行右少弁平親宗の勧めに従って喜捨を行ったが、さらには諸国の土民も針や餅四く五枚を引き出物として差し出し、結縁を求めたとされる。そして海岸に仮屋を設けて千体の仏像を安置するとともに、四八の護摩壇を設置し、三日間法華経の転読を続けたが院もその中に加わったという。そして、後白河は導師を務めた公頭に感動し強引に僧正に昇進させたため、兼実を「未曾有の事」と仰天させている（『玉葉』三月十九日条）。

清盛が福原で千僧供養という仏教的な大イベントを催した原因はどこにあったのであろうか。もちろん、

海上交通の危険を排除し、貿易の発展を祈るといった目的があったことは否定できないだろう。しかし、同時に主要な権門寺院の高僧を動員し、院から庶民に至るまでの結縁を求めたこと等を考え合わせると、この儀式の持つ意味は決してそれに止まらないのである。

すなわち、清盛は権門寺院の僧侶を自在に動員して最大級の法会ほうえを行うことで、軍事・政治に続いて仏教界の支配者たりえたのである。さらに、この千僧供養を考える上で常に後白河院が御幸していた点に注目する必要がある。清盛と院の対立が顕在化した安元三年（一一七七）以降、この儀式が消滅した事実は、開催に当たって院の存在が不可欠であったことを物語る。先述のごとく、院が千僧供養において僧綱を授与していたように、かかる僧に對する人事権を掌握していた院の存在を通して、初めて僧侶の統制が可能となり、空前の大法会が開催できた点は無視できない。

さて、例年千僧供養が行われる安元二年三月、後白河院・建春門院一行は福原に赴かずには有馬温泉に向かった。すでに触れたように有馬は療養の場であったが、おそらくこの入湯は建春門院の病氣治癒を目的としたものと考えられる。なぜなら、その四カ月後の七月八日、彼女は三十五歳の生涯を終えているからである。このため翌年三月の千僧供養は女院の菩提を弔うものとなり、法皇自ら中央の護摩壇を修したほか、参列した僧侶は「東寺・天台・真言師等、各宗長者已下、大略残る人なし」（『玉葉』安元三年三月二十二日条）という壮大な規模となった。院の殿上侍臣、北面・武者所・主典代さかんだい・庁官に至るまでの者たちが持経者となった。これに對する清盛の引出物は、「唐物等珍重」であったという。しかし、そのわずか三カ月の後には、列席した院近臣・近習たちの多くが、清盛によって虐殺されたり、あるいは処罰を受ける運命にあった。す

なわち、いわゆる鹿ヶ谷しかがたに事件が勃発することになるのである。

結局、建春門院の死去が清盛と後白河院という二人の権力者の対立を顕在化させるに至ったといえよう。その意味で、八月に治承と改元されるこの年は、まさに疾風怒濤の時代の開幕であった。

第四節 「平氏政権」の成立

1 鹿ヶ谷事件

鹿ヶ谷事件 『平家物語』によると、安元三年（一一七七）五月二十九日夜、京の西八条の居館に滞在していた清盛は一人の武士から驚くべき密告を受けた。後白河院と院近臣たちが、鹿ヶ谷しがたにある法

勝寺しょうじ執行僧俊寛の山荘に集まって、平氏打倒の陰謀を企てているというのである。密告者の名は多田蔵人くろうど行綱。かの源頼光の末裔にあたり、摂津国多田せつを本拠とする北面の武士であった。密議の席における院近臣の狂態を見かねて密告に及んだと伝えられていることは周知の通りである。

これを聞いた清盛は迅速な行動を起こし、その翌日には院近臣たちの一斉逮捕に踏み切った。ここに鹿ヶ谷事件が勃発したのである。『玉葉』には西光等が入道相国を「危ぶめ」るべき謀議を行ったとあるだけで、事件の詳細は『平家物語』にしか見えない。しかし、『愚管抄』には密議が僧静賢の山荘で行われたとあるし、『玉葉』によると清盛は五月二十七日に入京し、翌日には後白河と対面していたから、『平家物語』の記述をにわかには信じるわけにゆかない。

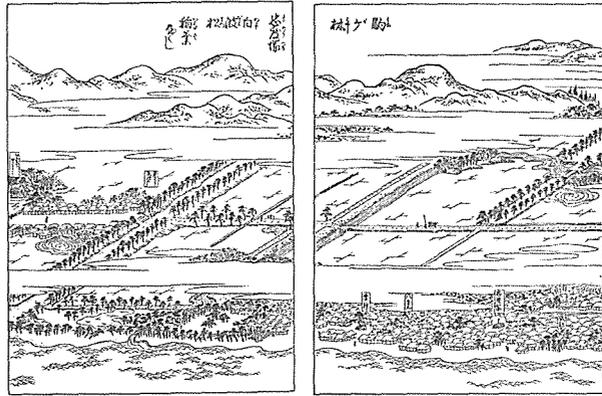


写真32 『撰津名所図会』に見える駒ヶ林

それはともかく、六月一日に清盛が僧西光・大納言藤原成親以下を逮捕し、即日西光を斬首したのを始め、成親を備前に配流して殺害する等、彼らを相次いで処刑したのは紛うことない事実であった。また、俊寛・平康頼等は福原に連行されて妹尾兼康に預けられた後、鬼界島に配流されたという。

なお、延慶本『平家物語』や『源平盛衰記』によると、康頼等は福原付近の「小馬林」において出家したことになっている。この「小馬林」は和田岬から西に続く海岸線の一部にあたる景勝の地で、近世以降は駒ヶ林村と称され、現在も長田区に駒ヶ林町という地名が存在している。

さて、この事件の直接的な背景には、延暦寺の強訴があった。すなわち、この年の四月、院近臣西光の男で加賀守であった藤原師高が、同国の延暦寺末社である白山の所領をめぐる紛争原師高が、同国の延暦寺末社である白山の所領をめぐる紛争を起こして延暦寺の強訴を受けた。そして、平重盛軍の不手際な対応もあって院も強訴に屈し、師高は尾張国に配流されたのである。しかし、後白河院は五月に入ると報復として天台座主明雲を捕らえて拷問した上に、謀叛の罪で配流に処することにした。ところが、護送の途中で悪僧が明雲を奪回したため、院と延暦寺の関係は険悪化するに至ったのである。この間、清盛以下の平氏一門が非協力的な態度をとったため、院近

臣の憤懣が募り平氏打倒の陰謀に発展した可能性もある。

そして、平氏一門の態度に業を煮やした後白河院は、ついに五月二十八日に清盛を院御所に呼んで延暦寺攻撃を命令するに至った。延暦寺との抗争で平氏を疲弊・混乱させて、平氏に打撃を与えようとしたのであろう。かくして、清盛は長年提携してきた延暦寺との関係を分断され、しかも延暦寺の巨大な兵力との正面衝突を回避し得ない情勢に追い込まれていたのである。

こうしてみると、この時点で院近臣を攻撃する口実を得たことは、清盛にとってまさに起死回生の天佑を意味しており、先述のように密告により偶発的に陰謀が露見したとする『平家物語』は疑わしい。いずれにせよ、後白河が清盛を追いつめたことが事件の伏線であったことは事実である。それにしても、かつては建春門院を介して緊密な関係にあった両者が、ここまで激しく対立するようになった原因はどこにあったのか。もちろん、直接的な原因は彼女の死去にあったが、それは対立を顕在化させた契機に過ぎず、対立の本質はさらに根深いものと考えられる。そこで、両者の関係について、遡って検討を加えることにしたい。

対立の背景

後白河院政の成立とともに、両者は協調したとされる。先に触れたように院が千僧供養に出席したことはもちろん、清盛の著しい官位の昇進、高倉天皇の即位、清盛の女徳子の入内・立后等は、まさしく両者の蜜月を物語るかのような出来事といえよう。しかし、この頃から両者は完全に協調していたのではない。

先述のごとく、鹿ヶ谷事件の前提には、延暦寺の強訴に対する防御に際して平氏一門が消極的な対応を示したことがあった。しかし、同様の事件はすでに存在していた。すでに永万元年（一一六五）の二条天皇死



写真33 平清盛像（天子摂関御影）
（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

が、憤懣に耐えない後白河はすぐに彼を召還し、「奏事不実」を理由に檢非違使別当の平時忠、その叔父で藏人頭の信範という、公卿平氏の一門を配流するという暴挙に出る。むろん強訴再発の危険が高まったが、その最中の翌年正月、清盛は重盛・頼盛を福原に下向させたのである。おそらく事態を協議したのであろう。その直後に上洛した清盛は後白河と会見、時忠・信範の召還、成親の解官で事件を落着かせた。出家したとはいえ、平氏一門内では依然家長清盛が主導権を握っていたことがわかる。

それはともかく、すでに両者が協調関係にあったとされる時期から、清盛は延暦寺の強訴に際して、院の命令を無視し院近臣を窮地に陥れる行動に出ていることになる。元来、清盛は出家に際して天台座主明雲を戒師に迎えたように、延暦寺とは政治的な連携関係にあった。このことが清盛の態度の背景に介在していたのは疑いない。したがって、清盛は自身の政治的利害のためには後白河の命令をも無視したのであり、両者

去の直後に発生した延暦寺強訴に際して清盛がその防衛に出撃しなかったため、院近臣の中から激しい非難の声があがったという。もっとも、これは『平家物語』のみの記述であり、にわかには信じられない面もある。

一方、清盛が出家し、福原に退去した翌年の嘉応元年（一一六九）暮れ、尾張国の知行国主で院近臣の権中納言成親が延暦寺の強訴を受けたが、この時も平氏一門は防衛に消極的な態度をとった。このため成親は配流される

の間には協調と同時に乖離・対立が存在していたといえる。

その一因は、平氏の台頭にもなつて高位高官が独占されたために、圧迫を受けた院近臣の反発が強まったことにある。鹿ヶ谷事件の前年十二月の除目^{じゆもく}では、清盛の「最愛の息子」で「当時無双の権勢」を誇り、位階も上臈^{じやうろう}であつた知盛を抑えて、院近臣の藤原光能^{みつよし}が藏人頭に任ぜられている（『玉葉』十二月五日条）。翌年正月に平宗盛が右大将に任命されたため、競望した藤原成親が憤懣を抱き鹿ヶ谷事件の一因にもなつたとされる『平家物語』の逸話は有名であるが、近年は虚構とする説が高まつている。しかし、こうした逸話が生まれた背景には、種々の人事で官位をめぐる軋轢の発生が存したのである。

しかし、両者の対立にはより本質的な問題があつた。すなわち、院政期の政務は幼少の天皇を擁立した院と院近臣による専制政治という形態をとつており、後白河とその権威にのみすがる近臣たちも院政を確立・強化し、同様の政治を指向したものと考えられる。したがつて、彼らにとつて、先述のように元来二条親政に親近感を持ち、白河院の落胤とされて高い政治的権威を有し、その上に最大の武力の統率者でさえある清盛は、まさに院の専制を掣肘する危険な存在であり、排除の対象でさえあつた。むろん、一門の政治的地位の上昇を図る清盛が、後白河院のもとで近臣が権力を掌握することを嫌つたのは言うまでもない。近臣に対する強訴に際して、清盛が消極的な態度をとつたのもこのためである。そして、ここに両者が深く対立する原因があつた。

皇位をめ
ぐる葛藤

さらに、鹿ヶ谷事件の直接的な原因としては、高倉の地位をめぐる対立も存在していた。院や院近臣にしてみれば、右に述べたような理由から、高倉が成人した場合には早急に退位させて、

意のままになる幼主の擁立を考えていたはずである。これに対し、天皇が妻の甥にあたる上に、すでに女子を入内させている清盛にしてみれば、高倉天皇は平氏一門の權威の源泉でもあり、何としても擁護すべき存在だったのはいまでもない。

すなわち、母建春門院の死後、すでに十六歳の成人を迎え、皇子のない高倉の立場は不安定となった。そこで、院は安元二年（一一七六）十月に自身の幼い皇子一人を相次いで高倉の養子とする工作を行っている。九条兼実かねざねは「疑ふらくは儲式（皇太子）となすべきの器か」と記しているが、『玉葉』十月二十九日条、おそらくは成人した高倉を退位させる準備であろう。こうした動きが清盛を刺激しないはずがない。結局、高倉天皇の立場をめぐって両者の対立は激化することになり、ついに院近臣加賀守藤原師高に対する延暦寺の強訴問題を契機として、両者は衝突することになる。

安元三年六月一日、清盛は院近臣の首魁西光を捕え拷問を加えて斬首した。そして重盛の義兄にもあたる成親を備前に配流し、のちに虐殺している。院近臣に対する清盛の憤りの激しさは明白である。しかし、さしもの清盛も後白河院に対しては、後の治承三年政変のごとく幽閉・院政停止等の強硬手段に訴えることはできなかった。その一因は親院政派であった嫡男重盛の諫止にあったが、もう一つの原因としては、後白河院に代わる院を擁立し得ないことが挙げられる。すなわち、後白河院政を停止した場合、高倉に皇子がないために讓位は困難で、彼の院政は不可能だったのである。

ところが、こうした条件は相次いで消滅していった。まず、翌年十一月には六波羅邸で徳子が待望の皇子とみむす言仁親王を生んだ。この皇子を即位させ、高倉に院政を行わせることができれば、後白河を政權から追放す

ることが可能となるのである。両者の対立は先鋭化せざるを得ない。しかも、翌治承三年（一一七九）七月には両者の緩衝帯であった重盛が死去したため、清盛を抑止しうる有力な平氏内の親院政派は姿を消してしまった。

ここに至って、もはや院と清盛の衝突は不可避となったのである。かくして、治承三年政変が勃発することになる。

2 治承三年政変

院政の停止

治承三年（一一七九）十一月十四日、巖島参詣に向かう途中にあった宗盛をも伴って、清盛は福原から数千の大軍を率いて上洛した。京中は大騒動となり、洛中の人家は資材を東西に運ぶありさまであったという。その翌十五日、清盛が中宮徳子以下一門を率いて鎮西に下向するのではないかと噂が飛び交う中、清盛は行動を開始した。

まず、関白藤原基房・権中納言師家父子が解任され、清盛の女婿だった故基実の男で、やはり女婿である基通が関白・氏長者に就いた。かつて白河院によって関白忠実が事実上解任されたことはあったものの、この時は一応長男忠通に譲渡した体裁をとったし、まして一般の臣下による関白の解任に至っては未曾有の出来事で、貴族に与えた衝撃は計り知れないものがあつた。

さらに十六日には清盛と親しい関係にあり、鹿ヶ谷事件の直前に後白河によって天台座主を解任されてい

次の点を指摘している。すなわち、まず後白河が元来平重盛の知行国で、その没後は子息維盛いせいが継承していた越前えちぜんを奪って院近臣みかど光能みつよに与えたこと、清盛の女盛子が相続していた夫藤原基実の遺領を、彼女の没後に後白河が奪取したこと、そして基房の子で八歳にすぎない師家が、基通を抑えて権中納言に昇進したことの三点である（十一月十五日条）。なお、『平家物語』は院に忠節を尽くした重盛が死去したにも関わらず、院が遊興を止めなかったことも理由の一つとしている。

『玉葉』が指摘する問題のうち、盛子の遺領問題や師家の昇進問題は、院と関白基房とが結んで清盛を挑発した結果であった。院は摂関家との提携によって清盛に対抗しようとしたのである。『百練抄』には「上皇と関白、平氏党類を滅せしむべきの由、密議あるの由其の聞こえあり」（十一月十五日条）という記述さえも見られる。「滅せしめ」のような軍事行動が行われる可能性があったのか否かは定かではないが、政変に際して清盛が弟頼盛を解官し、しかも先述のごとく両者が合戦するのではないかという噂が広まったことは、院の計画に頼盛が関係していた可能性を感じさせる。

頼盛の動向はともかく、おそらく平氏内における親院政派の中心重盛の死去によって院は強い危機感を抱き、摂関家以下の有力な貴族たちを組織するとともに、政權の中枢から清盛を排除しようとしたものと考えられる。突然軍事力を行使し、関白の解官配流や院の幽閉という強行手段を取らざるを得なかった点に、清盛の抱いた危機感の強さと追いつめられた立場とが窺われるのではないか。

清盛の政 治承三年政変は、あたかも京の政界を巨大な旋風が吹き抜けたかのごとき事件であった。この権構想 結果、後白河院政は停止され、翌年の安德即位とともに、外孫が天皇、院である高倉上皇、摂

政基通がともに婿という体制が成立する。そして全国半ば以上が平氏の知行国となり、文字通り平氏一門による国政の乗っ取りが実現したといえる。まさに、治承三年政変は平氏政権の成立の重大な画期であった。また、この政変によって清盛の独裁が成立したとする説も有力である。

ところで、清盛は二十日に後白河を幽閉するや、その日のうちに福原に向かっていく。『平家物語』（巻第三）は「入道相国はかくさんかくにし散されたれ共、御女中宮にてまします、関白殿と申も聳也。よろづ心やすうや思はれけむ、政務はたゞ一向主上の御ばからひたるべしとて、福原へ下られけり」とあり、この旨を宗盛が奏上したのに対し、高倉天皇は拒絶の意志を示したという。『平家物語』の記述には、清盛の下向を二十三日としたり、史実との食い違いが見られるが、注目すべき点は以後の政務を高倉に任せたとすることである。

『平家物語』は高倉が清盛の申し出を拒絶したというが、この点は信じ難い。なぜならば、政変において天皇は一貫して清盛を支持してきたからである。例えば、鹿ヶ谷事件における西光や成親の処刑は、あくまでも清盛が私刑として行ったにすぎない。成親が正式に解官されたのは彼が備前に連行されてからであった。ところが、この政変では基房以下に対して、解官・配流という国家の公的手続きによって処罰が行われているのである。これは、天皇の命令なくしては考えられないことといわなければならない。また明雲の天台座主への復帰も天皇の許可なくしては不可能であった。そして、何より天皇の支持がなければ、院と撰関家という強力な政治的権威に対抗し、関白を配流し、院を幽閉することなど到底考えられないのである。

一方、清盛は翌年四月に外孫の安德を即位させるが、これも今回の政変の所産であることはいうまでもな

い。このため、清盛は安徳を擁して摂関家と同様に外祖父として独裁政治を行おうとしたとする解釈もある。しかし、当時摂関以外の有力貴族が天皇の外祖父となった例は少なくないが、彼らが国政に関与することもなかったし、その権限も存しないのである。清盛のみを突出した例外と考えることは疑問と言わなければならない。まして当時は院政が政治の常態で、外戚が政權を握る体制の再建は考え難い。

清盛の願望は天皇との姻戚關係を維持することで、平氏の家格と地位を確立することにあつたから、当初彼は院・天皇を傀儡かいらいとして独裁政治を行うつもりはなかった。外孫安徳を政治的權威の源泉として、女婿高倉院が執政する体制こそが最も望ましいものと考えていたとみられる。したがって、清盛の福原への帰還は、『平家物語』の説く通り、彼が政務の前面に立つ意志がないことを物語るものであり、この政変を期に清盛の独裁政權が成立したと理解するのは事実と相違するといわねばならない。

以上のように、高倉の立場、清盛の思惑等から総合すれば、高倉に政務を委ねたとする『平家物語』の記述も否定すべきではないのである。そして、清盛が京から直ちに福原に帰ったことは、政務から一線を画した清盛の立場を明示するものといえよう。当時の福原は、依然としてあくまで清盛の隠居の場であり、外交・貿易の舞台に止まっていた。清盛の内心には遷都への野望は秘められていたと思われるが、それはまだ短時間のうちに実行される予定ではなかったと考えるべきである。

ところで、清盛の政治的地位の上昇とともに、平氏の信仰厚い厳島を訪れる皇族・貴族も増加していった。このため、当時の福原や神戸市域の様子を描いた記録・紀行文等も生まれ、当時の光景や地理を具体的に知り得ることになる。以下では、治承三年六月における前まへ太政大臣藤原忠雅の厳島参詣に関する『山槐記』

の記事と、治承四年三月、退位後最初の参詣として厳島に向かい、重大な政治的事件となった高倉の御幸を描いた『高倉院厳島御幸記』について、詳しく紹介することにした。

3 厳島参詣と福原

前大相国藤原 藤原忠雅は清華家の一つ花山院家の祖にあたり、白河・堀河天皇の摂関を務めた師実の次

忠雅の下向

男左大臣家忠の孫で、父は権中納言忠宗である。院近臣末茂流と密接な関係を持つと共に、

男兼雅と清盛の娘を結婚させる等、巧みに権力者に接近して官位を上昇させた。そして、仁安三年（一一六八）八月には、清盛辞任後空席となっていた太政大臣に四十五歳で就任、嘉応二年（一一七〇）まで在任している。



写真34 藤原忠雅像(天子撰関御影)
(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

彼の厳島参詣は、弟忠親の日記『山槐記』の治承三年（一一七九）六月二十二日条に記録されているが、欠落部分が多く全貌を知り得ないは残念である。忠雅が厳島に出掛けた原因は不明だが、厳島が平氏の尊崇する神社であること、また福原で歓待されていることから見ても、姻戚関係にある清盛の招待・勧誘があったことは疑いない。忠雅は同月七日に京を発ち、この二十二日に帰京しているが、忠親は参詣に同

行した共侍民部大夫政清から様子を聞いて日記に書きつけたという。

これによると、七日に京を出立した忠雅一行はその日のうちに河尻の寺江にある山城法眼の山荘に到着した。翌日は巳の刻（午前十時頃）に清盛が献上した車で福原に向かったが、浜の砂が深いために牛三頭を連ねたとあって、この段階では寺江から福原への道路が整備されていなかったことが窺われる。忠雅は申の刻（午後四時頃）に福原に到着した。宿所となった平頼盛の別荘は清盛の邸宅から四〜五町の距離にあったと記されており、平野にあった清盛邸と荒田の頼盛邸の距離に合致している。ついで忠雅は、清盛邸から一町ばかりの距離にある湯屋に出掛けているが、これは今日も雪御所町ゆみどころの北、湊山町にある鉱泉と考えられる。

こうして旅の垢を落とした忠雅はいよいよ清盛と対面する。清盛は弟経盛とともにその場に臨み、内侍ないしと称する敵島神社の巫女による女田楽で忠雅をもてなした。これは、後の高倉院御幸の場合と同様である。その晩、忠雅は清盛に誘われて船遊びに出たらしい。両者は別の船に乗ったが、清盛は「唐船」を用いたという。おそらく彼は宋人と密接な関係にあって、自由に宋船を用いることができたのであろう。また、この日の条文からは、これ以前に左大臣藤原経宗も福原に赴き、同じもてなしを受けていたことも判明する。もっとも、この日は「怖畏あり」という状態で、忠雅たちは沖合に船を出すことはなかったらしい。

翌九日未明、清盛の鼓に応じて船は一斉に出立し、和田岬を巡って日の出を迎え、辰の刻（午前八時頃）に経ヶ島から二〇町を隔てた「小馬林」に到着した。「小馬林」は前述のように和田岬の西にあたる景勝の地で、現在の須磨区から長田区に相当する。それはともかく、この時清盛はどうしたことか「今日の体不快」と称したという。翌日も海路に難があったとあるから、海が荒れて思いどおりに航海できなかったのかもし

れない。再び一行は経ヶ島に帰ったが、その日の宿所は不明である。あるいはやはり頼盛邸だったのであるか。

翌日、忠雅は清盛とともに海路小馬林に至ったが、その後は手興で高砂古（高砂市）に向かっている。なお帰路の福原の様子については、記事が欠落しているために知ることはできない。

次に中世紀行文学としても著名な『高倉院厳島御幸記』の記事を取り上げることにはしたい。

高倉上皇の

平氏政権のもとの摂津福原、そこを基地として西国へ往来する瀬戸内の航海、浦泊や島々

厳島参詣

のありさまなどを、巧みな筆でえがいた紀行文に、治承四年（一一八〇）三月、高倉上皇の

厳島参詣に近臣の院司としてつき従った源通親の『高倉院厳島御幸記』（『新日本古典文学大系』）がある。以下では、高倉院一行が立ち寄った福原などの神戸市域に関する叙述はもちろん、当時の海上交通の実態を示す興味深い記述について詳しく紹介することにした。

源通親は村上源氏久我内大臣雅通の一男で、この年治承四年正月二十八日参議に昇進し、二月二十五日、高倉天皇が安徳天皇に譲位して新院となるにともない、新院别当となった。ときに三十二歳であった。後に後鳥羽院政のもとで公家政権の中心となった敏腕の政治家であったが、平氏政権下では清盛や高倉上皇に信任され、立身している。また、文才に富み、歌人でもあった。

一方、高倉上皇は、後白河院第七皇子で、母は建春門院滋子。滋子の姉平時子は清盛の正室であり、その娘徳子が高倉天皇中宮となり、東宮言仁親王（安徳天皇）を生んだ。平家のミウチとしての縁が深い天皇である。治承三年、清盛が政変をおこして後白河院政を停止したが、翌四年二月に譲位し、厳島に参詣した。

言隆季・藤大納言実国・五条大納言邦綱・土御門宰相中将通親（御幸記筆者）、殿上人には左中将隆房・右中弁兼光らであった。そのほか平家一門の要人、前右大将宗盛・頭亮重衡・讃岐中将時実が加わっていたことは、御幸が平家主導で行われたことを示すものであろう。

新院御幸は三月十七日に京を出発と定められていたが、前例のない厳島詣に反発した南都北嶺の大衆が蜂起して、鳥羽に押しこめられている後白河法皇を奪取するという風聞があり、平家一門の宗盛・通盛・経正らが法皇御所を守護するということで、御幸は延引し（『山槐記』）、十九日に出京している。平宗盛も御供に加わったが、当時福原にいた清盛の命令で、福原から京へ引き返すことになっていたという（同上）。

『御幸記』の後の記事から推察すると、この頃大輪田泊には、清盛の指図によって、新院の御座船となる宋船が入港し、神崎川河口の河尻へ、新院を迎えに行く準備をしていたようである。また一行を乗せる多くの海船も集められ、「神宝の船」「陰陽師の船」など船団の編成に、港は活気づいていたことであろう。『御幸記』の筆者通親らは、まもなくその宋船を、初めて河尻の港で目にするようになる。

高倉上皇の

福原到着

都から福原へと一行が向かう道筋は、当時の貴族が摂津へ行くとき普通にとる淀川下りの船路であった。上皇は三月十九日、八条大宮の「二位殿」（清盛夫人時子）の邸宅を出て、桂川の河岸にある鳥羽の草津から乗船、美豆の浜に立寄って石清水八幡宮を拜み、追い風になる「東風かぜ」を背にうけて順調に川を下り、申の刻（午後四時頃）に、神崎川の河口の寺江にある大納言藤原邦綱の別邸に到着した。このとき、上皇は御船をそのまま邸内の池に引き入れ、釣殿から直接に下船したという。この邦綱の寺江邸は、瀬戸内海に通じる川口の要港に設けられた豪奢な別荘で、後の福原遷都の際にも、京・福原

を往来する貴族らの宿所となり、上皇らの御座所にもなるなど、重要な中継施設となった。

ここで描かれている寺江邸のありさまは、次のようであった。

申の時に河尻の寺江といふ所に着かせたまふ。邦綱の大納言御所造りて、御設け心を尽して、御船ながらにさし入れて、釣殿より下りさせ給。御障子どもも、唐の山との絵ども描きちらしたり。厩に葦毛の馬ども二疋立てて、めづらしき鞍ども懸けたり。御よそひの物ども数知らず。上達部殿上人の居所ども、みなそのよそゐあり。

寺江に関する記事で注目されるのは、このとき、福原の清盛の指図で、「からのふね」（宋船）が河尻の港へ回航されていたことである。

福原より、「けふよき日とて、船に召しそむべし」とて、唐の船まいらせたり。まことにおどろくし、く（人の目を驚かすさまで）、絵に描きたるに違はず。唐人ぞ付きてまいりたる。

清盛の計画では、高倉上皇嚴島詣の御座船に宋船を用いることになっており、この日、三月二十日が吉日なので、上皇の初乗りのために、宋人の船頭が座乗する船を河尻へさしむけたのであった。王朝貴族社会の伝統として、帝王が異国の者に接見することは、宇多天皇の『寛平御遺誠』にあるように慎むべきこととされてきたが、清盛はタブーを破って、初乗りした高倉上皇のそば近くに唐人を侍らせ、供の貴族たちを驚かせた。このときの院の乗船は試乗にとどまり、河尻の入江のうちを漕ぎめぐっただけで下船している。

この日は夕方から雨になり、翌日の行程について、寺江に留るか、陸路福原に至るか、御船で海路をとるかが、右大将宗盛を中心に議せられたが、明くる朝も雨で、日程に限りがあるため留ることができず、また

「雨の空は風定まらず」という判断で船路を避け、陸路を福原へ赴くことになった。上皇は輿、供奉ぐんぷの人びとは馬に乗り、「音に聞きつる鳴尾の松、聞きもならはぬ波の音、磯辺近く、いつしか馴れぬる心地しつゝ、いづくともわかず山川をうち過ぎ、はるくく」と行く道をとどり、西の宮の社前では法施を奉って、無事都へ帰らんことを祈った。やがて未の刻（午後二時頃）には六甲山麓の「都賀の山坂」に着き、ここで昼食をとり、それから生田森などを過ぎて、申の下刻（午後五時頃）、福原に到着した。

かねてから御幸を待ちうけていた清盛の福原邸における歓待ぶりは、『御幸記』にこう記されている。

入道大きおほいまうち君心を尽して、御まうけども、心言葉も及ばず。天の下を心に任せたるよそをいの程、営まれたる有様、思ひやるべし。まことに六十六の洞に入たらむ心地す。木立庭の有様、絵に描きとめたし。音に聞きしにもやゝ過ぎて、めづらかに見ゆ。

この夜の宴には、厳島神社から内侍八人が召され、いずれも「唐の女の装ひ」をして万歳楽などさまざまな曲を舞い、舞い終ると御前に参上して神楽歌をうたった。日が暮れて山陰が暗くなると、庭にあかあかと篝火がたかれ、唐土の魯陽が入日を返したという故事もかくやと思われたという。上皇は夜更けて入御したが、心重い旅の愁いのためか、楽しげな様子ではなかったらしい。

福原出立と山田

山莊・高砂泊

翌日、三月二十一日の暗いうちに、上皇の一行は、出京以来着用した浄衣の姿で福原をあとにした。この日も海は荒れ気味で、「風すこし荒立ちて、波の音も気あしくきこ

え、「浮べる船どもすこし騒ぎあ」う天気だったので、引続いて陸路をとり、「音に聞きし和多の岬す、須磨の浦などいふ所く」を浦づたいに行くと、荒き磯辺を漕ぐ船が、帆を張って波の上を走りあうのが見られた。

一方、「福原の入道」清盛は、先の「唐の船」に乗り、海から参ったとある。清盛の心づもりでは、宋船を御座船とする厳島詣の船団を率いて、大輪田泊から華やかに船出したかったたのであるが、それが果たせなかつたので、次の港である播磨の高砂泊まで回航する宋船に、自ら乗り込んだものと思われる。

須磨の浦を過ぎた上皇たちの行列は、やがて摂津・播磨の国境にある「播磨国山田といふところ」に着き、ここで「昼の御設け」（昼食）となった。この山田は現在の垂水区西舞子辺で、山田川が明石海峡に流れ込む辺りにあり、海辺の景勝の地に平家の山荘が営まれていたらしい。『御幸記』はそのときのさまを描いて、

庭には黒き白き石にて、霰の方に石畳にし、松を葺き、さまく

の飾りどもをぞしわたしたる。御設け、海の鱗をつくし、山の木実を拾いて営める。

と記している。ここ山田の地は、後に平家没官領の一つ、「播磨山田領」が『吾妻鏡』にみえ、平安末当時、平家領の荘園であったことが知られるが、高倉上皇の「山田の御所」（延慶本『平家物語』）、清盛の遺言によってその遺骨を納めた「播磨国山田法花堂」（『吾妻鏡』治承五年閏二月四日）、上皇が厳島の帰りに入港・上陸した「山田浦」（『平家物語』）などがあつたことから窺えるように、平家が福原の西に営んだ海陸の重要拠点であつた。



写真35 山田（西舞子付近・垂水区）の風景

山田の山莊をたち出でた上皇らは、風浪の立ちさわぐ海ぞいに進み、明石の浦を過ぎて、申の刻に播磨の高砂の泊に着いた。ここは大きな港で、「よもの船ども碇下しつゝ、浦くくに着」いているのが見られた（『御幸記』）。清盛が乗った御船の宋船は、すでに一足早く入港し、上皇の乗船を待っていたが、大船で船脚（吃水）が深く接岸できなかつたので、「端船」（小舟）を三艘結び合わせて渡し舟とし、それへ上皇の御輿を昇きすえ、側近の貴族らだけで、御船に移し乗せたところがある。清盛が意図したであろうように、宋船を瀬戸内海へ多く招き入れるためには、内海の津泊に不備なところが多く、修築の必要が痛感されたことであろう。碇泊中の船に乗り込んで翌朝の出港を待つ上皇らには、「聞きもならはぬ波の音」がおどろおどろしくきこえ、辺りの「浦人の声」も耳に留ったという。

上皇らを迎える準備のため、あらかじめ道中の国々へ遣わされていた使たちが、この高砂の泊に帰参していたが、一行の人びとは彼らを都へ帰し遣わすついでに、都へのたよりを托し、『御幸記』の筆者源通親はそれに、「思ひやれ心もすまに寝覚めして あかしかねたる夜くのうらみを」と、須磨明石を詠みこんだ一首を添えている。

明くる三月二十二日、いよいよ出航する日となった。この朝の記述は、当時の船団がどのようにして港を出るかを、具体的に物語っていて誠に興味深く、平氏全盛の頃、その海の根拠地大輪田泊でも、このような光景が幾度となく繰り広げられたことを思わせる。『御幸記』の記事は次のごとくである。

「潮満ちぬ、出でさせ給べし」とて、我もくと船どもいとなみたり。「近く候へ」などたのもしくおぼしめしたる、いとかたじけなし。唐の御船より鼓を三度うつ。もろくの舟ども、はじめてこの声に

湊を出づ。出ではててぞ、一の御船は出さるる。舟子楫取なを心にさうぞきたり。櫓こがしの藍摺に黄なる衣どもかさねて、廿人着たり。なぎたる朝の海に、舟人のえいや声、めづらしくぞ聞ゆる。

この場合のように、大船を主体にした船団が出港する際には、座礁の危険を避けるため、満潮のときを待った。そのときが近づくと、それぞれの船では、われもわれもと出船の準備を急いだ。船団の中心となる大船（ここでは上皇・清盛・上達部かんたつ部らが座乗する「唐の御船」）は、船団を指揮する指令船となり、出航の合図がこの「一の御船」から発せられる。その合図は、鼓を三度打つことで、それをきいた諸々の船は一斉に港を出る。後の二十四日の記事に、「鼓を打ちて、備中の国せみといふ所に着かせ給」とあるように、入港の合図にも鼓を打った。海上における信号にも鼓が用いられたであろうし、それぞれの打ち方も、船人たちの間で取り決めがあったに違いない。

また「出ではててぞ、一の御船は出さるる」というように、供の船すべてが先行し先導する後尾に主たる船がつくのが、出船の方法であつたらしい。出港のときは帆を使わず、帆柱を倒し、水夫たちが舷側にならんで櫓權を漕いだ。「舟人のえいや声」とあるのは、漕ぎ手のかけ声である。

貴人に乗せたときのような晴れの出航には、舟子・櫓取かんどり（水夫・船頭）は、そろいの華やかな衣裳で身を飾った。「櫓こがしの藍摺に黄なる衣どもかさねて着た舟子二〇人とあるのは、一の御船の漕ぎ手である。

帰路の福原

その後、一行は播磨国室の泊、備前国児島の泊、備中国「せみと」、安芸国馬島を経て、二十十六日に安芸国厳島神社に到着した。京を出てから八日目のことであつた。この間、児島に

おいて上皇が夕焼け空の下の美しい浦々や向いの島がくれの山を眺めながら、目につく所々について尋ねたことがあった。この時、向いの山の彼方に、前年の清盛のクーデターによって備前国府の辺に配流された「入道大殿」(前関白藤原基房)の配所があると聞いて、上皇は衝撃をうけ顔色を変えたと記されている。また備中国の「せみと」において通親が記した「国々深くなるまゝに、山の木立石の立様もきびしく見ゆ」という一節は、遠国へ下る都人の旅の印象を簡明に語る名文であろう。

さて、厳島に到着した高倉院一行は奉幣ほうへいや神事を済ませた後、三月二十九日に帰路につくことになる。帰路の叙述は至って簡単である。

浦くく泊くくうち過ぎつゝ、やうく宮こ近くなる心地して、旅のなごりもおぼえず、疾くくと過ぎさせ給。

この記述のように、一行は旅の名残惜しさに浸る事もなく、そして途中の風景に心を動かされることもなく、ただ一刻も早い帰京を望んでいたのである。彼らが福原に戻ったのは四月五日の申の刻であった。「いま一日も宮こへ疾くと、上下心の中には思ひける」という人々の心情を知ってか知らずか、清盛は高倉院に「福原の中御覧せん」と称して、「御興にてこゝかしこ御幸あり」というありさまであった。

所のまま、作りたる所く、高麗人の配しけるも理とぞ見ゆる。あしたといふ頼盛の家にて、笠懸・流鏑馬などつかふまつらせて御覧せさす。

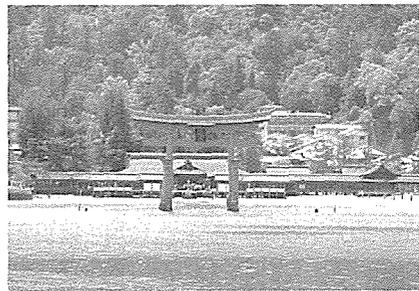


写真36 厳島神社 (広島県廿日市市)

「高麗人の配しける」の意味は不明確だが、あるいは高麗を思わせる異国風の町並みが整備されつつあったということであろうか。「あした」は「あらた」の誤記で、現在も地名が残る「荒田」を指す。同地にあつた平頼盛邸は、邸内で笠懸かさかけや流鏑馬やぶさめが催せる程の大邸宅であつたことが分かる。八日に平氏一門に対する恩賞として、重盛の嫡男資盛が従四位上に、藤原邦綱の男で清盛の猶子となつた清邦が正五位下に叙されてゐる。

一行の帰京は、九日であつた。途中、八幡山が見えたことを「たのもしくうれしく」思い、比叡山が見えたことに女房たちは騒ぎあつたという。福原における善美を尽くした清盛の歓待にも係わらず、人々の京に對する愛着は深まりこそすれ、減ずることはなかつたのである。わずか二カ月後の福原遷都に對する貴族の反発も当然であつた。

そして高倉院は「御瘦せもたゞならず」という状態で、医師を集めて灸治が行われたという。長旅の疲れもさることながら、一年足らず後に迎える死去の兆候が現れていたのである。